

# 第53回東京都公民館研究大会記録

日時 2017年（平成29年）1月21日（土）

午前10時～午後4時

会場 福生市民会館大ホール（全体会、基調講演）

福生市民会館公民館（第一、三課題別集会）

さくら会館（第二、四課題別集会）

主催 東京都公民館連絡協議会

大会事務局 福生市公民館



## 目次

第 53 回東京都公民館研究大会開催要項 .....	1 ～ 2
当日配布プログラム .....	3
東京都公民館研究大会の開催にあたって .....	4
挨拶 .....	5
歓迎のことば .....	6
全体会式典 .....	7 ～ 10
基調講演：朝岡幸彦氏 .....	11 ～ 23
課題別集会 .....	24
第一課題別集会（小金井市） .....	25 ～ 38
第二課題別集会（小平市） .....	39 ～ 68
第三課題別集会（日野市） .....	69 ～ 76
第四課題別集会（都公連委員部会） .....	77 ～ 83
アンケート結果 .....	84 ～ 98
第 53 回東京都公民館研究大会参加状況 .....	99





第 53 回 東 京 都 公 民 館 研 究 大 会 開 催 内 容

全 体 会 午 前 10 時 ～ 11 時 30 分

テマ「公民館のこれまでとこれから ～成果と方向性～」

基調講演 朝岡 幸彦氏 (東京農工大学教授)

課題別集会 (午後 0 時 30 分 ～ 4 時)

課題別集会名	討議内容	助言者	事例報告者	企画運営委員
第一課題別集会 高齢者の学びと講座づくり	超高齢社会と言われて久しい現代、65歳以上の割合が2025年には人口の約30%、2060年には約40%を占めると言われ、今後ますます社会における高齢者の割合は増加すると予想されます。各自自治体では、高齢者が充実した日々を送れるよう幅広く活動し仲間づくりや地域づくりを目的で高齢者向け講座を開催しています。小金井市は「高齢者学習」として公民館各館で実施しており、昭和38年開設以来、何十年もその形態は変わっていません。しかし、時代や社会情勢も変化し、市民からも多様な要望がある中で、新しい高齢者学習のあり方を検討することが必要であると考えます。時代や社会情勢の変化、超高齢社会に対応した高齢者の学びや講座づくりについて、各市の現状と課題について事例を交えながら考えます。	飯塚 哲子氏 (首都大学東京健康福祉学部看護学科准教授)	小山田 久氏 (立川市砂川学習館館長) 川上 美砂氏 (調布市西部公民館専門嘱託員) 村山 孝一氏 (小金井市公民館東分館長) 鈴木 浩一氏 (小金井市公民館東分館長)	小金井市公民館職員 菅本 孝和氏 菅本 孝和氏 和田 穂積氏
第二課題別集会 公民館から始める地域づくり	公民館は戦後間もなく日本の各地に設置され、地域の人々が集い、学び、産業や文化の発展をすすめるための拠点として大きく貢献してきました。地域づくりへの新しい取り組みが求められる中で、公民館がどのような役割を果たせるかが問われています。以上のよりな背景をおまえ、この分科会では、①地域づくりに来た公民館の役割に関する基調講演、②先進的な事例の報告 (3事例) を行い、「公民館から始める地域づくり」の可能性を検討します。事例としては、「地域課題の解決」「図書館と一体化した地域連携」「事業に対する住民参画に関する公民館活動」を取り上げ、基調講演とこれらの事例報告をおまえて将来展望を描きたいと考えています。	田中 雅文氏 (日本女子大学人間社会学部教授)	1 「公民館を拠点とした様々な取り組みについて」 長谷部 豊子氏 (国分寺市公民館運営審議会委員) 2 「なまらテラスLINKSの取り組みについて」 上田 滋氏 (小平市立仲町図書館職員) 3 「公民館事業企画委員会の取り組みについて」 植野 純氏 (小平市立給木公民館職員)	小平市公民館運営審議会委員 小平市立公民館職員
第三課題別集会 公民館からの発信力を考える	数多くの事業や講座を実施する公民館にとって、「情報発信」は以前から積極的に行われていました。各自自治体の広報や、各公民館独自の『公民館だより』の発行などは代表的な例といえます。しかし、2000年代以降のインターネットを中心とした情報化社会の到来を契機に、各々にホームページが開設されるなど「情報発信」は内容・量ともに大きな転機を迎えました。全国公民館連合会も『全国公民館ホームページ』や『全国公民館インターネット活用コンクール』を実施しています。さらに近年ではtwitterやfacebookといったSNSの普及が著しく、これまで公民館が行ってきた手法にとらわれない、「新たな情報発信」の手法が問われています。このような現状を踏まえて、公民館のこれからを考える中で必要な「発信力」についてぜひ各市の事例を持ち寄り、意見交換を通じて今後の発信力の可能性について考えましょう。	山本 恭仁彦氏 (ワラジナー)	※グループ討議を予定しています。 各市の事例があればご持参ください。	日野市中央公民館職員 佐藤 岳彦 榎田 一正 ほか
第四課題別集会 少子高齢化時代の公民館のあり方について考える	少子高齢化が進行し、過疎地では深刻な問題に陥りつつあります。東京において少しずつ影響が出始め、都市機能や地価との関わり方が変化していき、考えられます。その中で、子どもから大人、高齢者までかかる地域への視点として、公民館が期待されていること、役割が何なのかをグループに分かれて話し合い、皆さんで今後の公民館のあり方について考えてみたいと思います。	佐藤 一子(かっこ)氏 (東京大学名誉教授)	※グループ討議を行います。	都公道連合会運営委員 川村 光弘 (東大和市・委員部会長) 大橋 俊則 (昭島市・委員部副会長) 白崎 もと子 (小平市) 宮中 眞一 (小金井市) 中村 眞一 (日野市) 村上 栄穂子 (国分寺市) 長谷部 孝明 (福江市) 日野 剛 正文 (西東京市) 野田 孝二 (西東京市) 都公道連合会事務局 宮崎 勇輝 内藤 晋 (東大和市立中央公民館職員)

## 第 53 回東京都公民館研究大会

### 公民館のこれまでとこれから ～成果と方向性～

#### 1 開催趣旨

人口減・少子高齢社会の進展、そして各自治体の行財政改革とともに公民館や社会教育施設に要求される内容が、より厳しいものになってきています。しかし、公民館を取り巻く環境の変化に責めを転嫁し、時流に押し流されていってしまっているのでしょうか。公民館には住民の自由な学習・文化活動の権利を保障するなかで、ひとづくり・地域づくりを担ってきた歴史と成果があるはずです。

いま、あらためて公民館の誕生から今日までの流れを知ると共に、公民館が住民と共に創造してきた成果、あるいは取りこぼしてきたものは何であったのかを自ら明らかにし、持続可能な地域づくりの時代に求められる公民館の果たすべき役割や未来のすがたを明らかにする必要があるのではないのでしょうか。

次世代の学びを保障するためにも、自信と勇気を分かち合える研究大会としたいと思います。

#### 2 開催日時 平成 29 年 1 月 21 日 (土) 午前 10 時～午後 4 時

#### 3 プログラム

全体会 会場：福生市民会館大ホール (もくせいホール)	公民館のこれまでと これから ～成果と 方向性～	基調講演：朝岡幸彦氏 (東京農工大学教授)
第一課題別集会 (小金井市) 会場：福生市民会館・公民館 3 階 第 4・5 集会室	高齢者の学びと講座 づくり	助言者：飯塚哲子氏 (首都大学東京健康福祉学部看護学科准教授) 事例報告者：小山田久氏 (立川市砂川学習館係長) 川上美砂氏 (調布市西部公民館専門嘱託員) 村山孝一氏 (小金井市公民館貫井北分館長) 鈴木浩一氏 (小金井市公民館東分館長)
第二課題別集会 (小平市) 会場：さくら会館 3 階 ホール	公民館から始める地 域づくり	助言者：田中雅文氏 (日本女子大学人間社会学部教授) 事例報告者：長谷部豊子氏 (国分寺市公民館運営審議会委員) 上田滋氏 (小平市立仲町図書館職員) 植野稔氏 (小平市立鈴木公民館職員)
第三課題別集会 (日野市) 会場：福生市民会館・公民館 3 階 第 3 集会室	公民館からの発信力 を考える	助言者：山本恭仁彦氏 (プランナー) ※グループ討議を予定 各市、各団体の事例があればお持ちください。
第四課題別集会 (都公連委員会) 会場：さくら会館 2 階 第 3 集会室	少子高齢化時代の公 民館のあり方につい て考える	助言者：佐藤一子氏 (東京大学名誉教授) ※グループ討議を予定

#### 4 主催 東京都公民館連絡協議会

#### 5 後援 東京都教育委員会、東京都市長会、東京都町村会、東京都市教育長会、 東京都町村教育長会、東京都市町村教育委員会連合会、福生市教育委員会

## 東京都公民館研究大会の開催にあたって

第53回東京都公民館研究大会にご参加いただきまして誠にありがとうございます。昨年度の関東甲信越静公民館研究大会東京都開催が盛会に終了し、今年度は3年振りの従来方式の研究大会となります。全体テーマ「公民館のこれまでとこれから ～成果と方向性～」を掲げ、基調講演および4つの課題別集会によりまして、有意義で実りのある研究大会となることを期待いたします。

各市の公民館は、これまでも住民の自主的な学びや住民相互の結びつきを支援し、社会教育の中核を担う学びと地域コミュニティの拠点として、広く親しまれてきました。しかしながら、多様・複雑化した現代の社会状況では、過去に類を見ない課題が次々と噴出しており、住民はより高度な学習や多角的視点からの学び、新たな繋がりや更なる結びつきを求めているものと思われまます。このような中で、一人ひとりの人権を尊重し、人と人との繋がり的重要性を認識し、住民自らが課題を解決できる新しい取り組みについて、今改めて公民館から地域に再発信することの必要性を強く感じています。

折しも今年度は、公民館の設置運営をよびかけた文部次官通牒「公民館の設置運営について」が全国に通達されてから70年目にあたります。この節目の年に、公民館の原点を再確認することやこれからの公民館のあり方について、議論することは大変意義のあることと考えております。参加された皆様におかれましては、未来の公民館はどうあるべきなのかを見つめ直していただきたいと存じます。

最後に、本大会の事務局をお引き受けいただきました福生市公民館の皆様、課題別集会の準備にご尽力いただきました小金井市および小平市、日野市ならびに委員部会の皆様、また、お忙しい中、課題別集会の助言者および事例報告者をお引き受けいただきました皆様、そして、大会開催にご支援ご協力をいただきました関係者の皆様に、東京都公民館連絡協議会を代表いたしまして、心より感謝を申し上げます。

平成29年1月21日

東京都公民館連絡協議会  
会長 石田 進

## 挨拶

第53回東京都公民館研究大会が、福生市民会館・公民館等におきまして、開催市の皆様をはじめ、東京都公民館連絡協議会の関係者の方々の御尽力によりまして、盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。

また、本研究大会に御参画の皆様方におかれましては、日々、各地域の公民館における諸活動を通じまして、住民の教養の向上や生活文化の振興、地域の課題解決等に取り組まれていることに対しまして、深く敬意を表します。

公民館はそれぞれの地域における生涯学習・社会教育の中核的な拠点として、地域住民が集い・学び・交流する機会や場を提供することなど、活力とうるおいのある地域社会の実現に大きく貢献しています。

しかし、少子・高齢化、情報技術の高度化、ライフスタイルや価値観の多様化など、社会を取り巻く環境が大きく変化する中で、公民館に求められる役割や活動のあり方なども大きく変化してきている状況もあります。

このような中で、本日は、「公民館のこれまでとこれから ～成果と方向性～」を全体テーマとしまして、これまで公民館が果たしてきた役割や成果を確認しながら、改めて、今後の公民館の果たすべき役割や未来の姿を、参加者相互に研究・協議することは誠に時宜を得たものであると考えます。

公民館には、地域住民の学習・文化の拠点であるとともに、現代的な課題に主体的に参画をする人材の育成や、住民相互の絆づくりを通じた地域の活性化など、地域づくりに向けた更なる取組が期待されています。

本研究大会に参加されている皆様方が、有意義な研究・協議や意見交換等を行われ、その成果を生かした活動が各地域の公民館に広がっていくことを期待しております。

最後に、本研究大会が実り多いものになるとともに、公民館活動の更なる充実を祈念申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。

平成29年1月21日

東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課  
課長 川口英生

## 歓迎のことば

本日は、福生市で行われる第53回東京都公民館研究大会に、東京各地から公民館・社会教育関係者及び公民館利用者などの皆さまに、多数のご参加をいただき誠にありがとうございます。

本日の大会を企画する上で、まず、我々公民館に関わる者が元気を取り戻すきっかけになる大会にしていきたいという思いがありました。

たしかに、公民館を取り巻く状況が厳しいものになってきてはいます。しかし、それに押し流されるのではなく、そんな今こそ、公民館が住民の自由な学びの中で果たしてきた、ひとつづくり・まちづくりの成果を再評価し、その上で、これからの持続可能な地域づくりの時代に求められる公民館のあり方をさぐる大会にしたいと考えてまいりました。

そのため、今大会のテーマは「公民館のこれまでとこれから ～成果と方向性～」とし、午前中に参加者が一堂に会し、東京農工大学の朝岡幸彦教授にテーマに沿った基調講演をしていただき、ご参加のみなさまに共通の土台を持っていただいた上で、午後からの4つの課題別集会でそれぞれの課題について、さまざまな角度からの実践例にも触れながら議論を深めていただきたいと、今回は全体会・課題別集会の方式にいたしました。

本日の大会を開催するにあたり、東京都公民館連絡協議会役員会、同委員部会、小金井市、小平市、日野市の公民館の方々とよりよい大会にするために共に準備を進めてまいりました。

本日の大会が、公民館が果たすべき新たな役割・可能性を見出し、またご参加いただいたみなさまが、自信と勇気を分かち合える一日になることを祈念して、歓迎のことばとさせていただきます。

平成29年1月21日

第53回東京都公民館研究大会事務局長  
福生市公民館長 高橋 邦彦

# 全体会

## 1 主催者挨拶

東京都公民館連絡協議会会長  
国立市公民館長 石田 進

本日はお忙しい中、第53回東京都公民館研究大会にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

先ほど、司会の方からもご紹介ありましたが、昨年度の関東甲信越静公民館研究大会東京都開催が盛会に終了し、今年度は3年振りの従来方式の研究大会となります。全体テーマ「公民館のこれまでとこれから～成果と方向性～」を掲げ、基調講演後、4つの課題別集会を用意しており、有意義で実りのある研究大会となることを期待いたしております。

さて、各市の公民館は、これまでも住民の自主的な学びや住民相互の結びつきを支援し、社会教育の中核を担う学びと地域コミュニティの拠点として、広く親しまれてきました。しかしながら、多様化・複雑化した現代の社会状況では、過去に類を見ない課題が次々と噴出しており、住民はより高度な学習や多角的視点からの学び、新たな繋がりや更なる結びつきを求めているものと思われまます。このような中で、一人ひとりの人権を尊重し、人と人との繋がり的重要性を認識し、住民自らが課題を解決できる新しい取り組みを、今改めて公民館から地域に再発信する必要性を強く感じております。

折しも今年度は、公民館の設置運営をよびかけた文部次官通牒「公民館の設置運営について」が全国に通達されてから70年目の節目にあたります。この年に、公民館の原点を再確認することは、公民館のこれからのを考えるにあたって、大変意義のあることと考えております。

最後に、本大会の事務局をお引き受けいただきました福生市公民館の皆様、課題別集会の準備に関わっていただきました各市の皆様、また、お忙しい中、助言及び事例報告をお引き受けいただきました皆様、そして、大会開催にご支援ご協力いただきました関係者の皆様に、東京都公民館連絡協議会を代表いたしまして、心より感謝を申し上げます。よろしくお願い申し上げます。

## 2 来賓祝辞

福生市長  
加藤 育男

ただいまご紹介いただきました福生市長の加藤育男でございます。

本日、第53回東京都公民館研究大会が15年ぶりに、わがまち福生市で開催されますことをお喜び申し上げます。全都から福生市にお越しいただいた皆様方を心から歓迎申し上げます。

また、本日ご参加の皆様方におかれましては、日ごろから公民館活動を通じて、生涯学習・社会教育の充実・発展、さらに活力ある地域づくりのためにご尽力いただいておりますことに、深く敬意を表します。

福生市は、米軍横田基地があり、また50か国を超える国の人がお住まいであると同時に、玉川上水が流れ、江戸時代から続く造り酒屋が2軒あり、またその間に90もの蔵が建っているというように、和洋と新旧が一体となってまちを成しております。その中で公民館での多様性を持った学びが、ひとづくり、まちづくりに大きく貢献しており、今後もまちづくりの発展には公民館がさらに重要な役割を果たしていくものと期待しております。

さて、近年、社会の急激な変化に伴い、地域社会が抱える課題が多様に変化している中で、本大会で「公民館のこれまでとこれから ～成果と方向性～」をテーマに研究協議されますことは、誠に意義深いことであると存じます。

どうか本日お集まりの皆様方におかれましても、今回の大会を新たな公民館活動の更なる発展へのステップとして、また公民館での学びを、新たなまちづくりへ結び紡いでいただくためにも、本日の大会を成功させていただくことを切に希望するところでございます。

結びに本大会の開催にあたり、多大なご尽力をいただきました東京都公民館連絡協議会等関係者の皆様方に、深く感謝を申し上げますとともに、本大会のご成功を祈念申し上げ、歓迎の言葉とさせていただきます。

### 3 祝辞披露

東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課長川口英生様からの祝辞(プログラム掲載)の紹介 ※5ページ参照

### 4 来賓紹介(名前のみ紹介)

福生市教育委員会教育長 川越孝洋

### 5 主催者紹介(名前のみ紹介)

東京都公民館連絡協議会副会長・西東京市公民館長 大橋一浩  
第53回東京都公民館研究大会事務局長・福生市公民館長 高橋邦彦

### 6 閉会挨拶

東京都公民館連絡協議会副会長  
西東京市公民館長 大橋 一浩

ただいまご紹介いただきました東京都公民館連絡協議会副会長・西東京市公民館長をしております大橋でございます。本日は早朝より第53回東京都公民館研究大会の開会式にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

本日はこの後に「公民館のこれまでとこれから ～成果と方向性～」をテーマに東京農工大学教授の朝岡先生により基調講演をいただきます。午後からは四つの会場に分かれ、課題別集会が行われます。また平成29年度第54回東京都公民館研究大会につきましては狛江市が会場となり、実施する予定でございます。

本日は1日、長時間とはなりますが、今後の公民館活動の発展のために、基調講演そして、課題別集会が実りあるものになるよう願っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

### 7 福生市プロモーションビデオ「What 's Up FUSSA」上映



## 8 基調講演講師紹介

本日の講師である朝岡幸彦先生は、新潟県見附市でお生まれになり、新潟大学を卒業後、北海道大学大学院で学び、その後室蘭工業大学助教授を経て1995年に現在の東京農工大学に着任されました。現在は東京農工大学農学研究院教授として、環境教育学・社会教育学を教えていらっしゃいます。そして、日本環境教育学会や日本社会教育学会の役員を努めながら研究を深め、多くの研究者を生み出していらっしゃいます。

これまでの著書は環境教育と社会教育に多数ありますが、「講座づくりのコツとワザ」「持続可能な社会のための環境教育シリーズ」など、読みやすく解かりやすい内容の本を執筆されております。

## 9 基調講演

東京農工大学 大学院教授  
朝岡 幸彦

皆様おはようございます。

先ほどの福生市のプロモーションビデオの「FUSSA FUSSA YEAH!」というのが耳に残って、つい口ずさんでしまいました。それぞれのまちがこういった形のイメージ戦略を行うということは非常に重要なことだと思います。

私が教鞭をとっております東京農工大学は府中と小金井にキャンパスがあり、文字通り三多摩のご当地大学です。

私事ですが、数年前からフェイスブックを始めまして、時々いろいろなものを写真に撮ったりして更新しております。

昨日、勤め先の府中キャンパスで梅の花が咲いておりまして、それをフェイスブックに載せたところ大きな反響がありました。多摩地区の梅も桜もこれから非常に楽しみな時期になってきています。

さてパワーポイントに入る前に、皆様に少しお話しさせていただきたいのが、トランプ大統領のことです。民意ではいろいろ思うところもありますが、自国の元首ではございませんし、あまりとやかく言う筋合いはないのかもしれませんが。いずれにせよ、これからはハイリスク・ハイリターンな政治がいろいろな国で行われていくというような気がします。いろいろな意味で変わるチャンスである反面、いろいろな問題も起こってくる可能性があるという中で、我々はどういうふうにこの時代と向き合っていくのか、これが非常に重要な問題だと思います。政治的な立場を超えて、我々は共に世界のいろいろな地域の方と向き合わざるを得ないということです。

今回あえて都公連の大会でこのような話をさせていただいたのは、トランプ大

統領に関しまして、私たちにも少しだけ困ったことがあるからです。それはどう  
いうことかと申しますと、今から1週間ほど前、有名な女優メリル・ストリープ  
がグラミー賞授賞式の壇上で、トランプ大統領が選挙期間中に自分のことを批判  
した障害のある記者を揶揄するようなジェスチャーとメッセージをしたことを  
問題にしました。

尊敬すべき立場であるはずの大統領がそのようなことをしていいのかという  
メリル・ストリープの訴えに私自身、共感していたのですが、マケインさんとい  
う共和党内でトランプ批判をしている有名なコラムニストは「ブロードウェイの  
あのような華やかな場でああいう言い方をするから、トランプ支持者が増えてい  
くのだ」とコメントをしました。しかしながら、先ほど私が困ったことと申しま  
したのは、このやりとり自体のことを言ったわけではございません。問題なのは  
これからお話することです。

私ども研究者や皆様は学習を通して、何を学ぶのか、または何を発信してい  
くのか、その中で理性や常識、誰もが普遍的に前提にしなければならない価値を意  
識しています。しかし、「これは最低限守らなきゃいけないことだろう」あるいは  
「これは言うてはいけないことだ」ということを言っても、実はトランプ大統  
領を強く支持している人には響きません。このように言葉が通じない、気持ち  
が伝わらない、学んだ結果を語れば語るほどトランプ大統領が支持されてしま  
う状況をどうしたらいいのかということは、正直申し上げまして大きな宿題を課せ  
られた気分です。

おそらくこれからお話することと関係すると思いますが、やはり学習が大事だ  
と思います。どんな境遇にある人たちでも、学ぶということは生きる希望です。  
その生きる希望を通してでしか、我々は対話もできないし、一緒に歩むこともで  
きないのだろうと思います。愚痴のようになってしまいましたが、残された時間  
もわずかですので、さっそく本題に入らせていただきます。

今回のテーマが「公民館のこれまでとこれから ～成果と方向性～」というこ  
とですが、「これまで」のことは私より皆様の方がよくご存じだと思います。で  
すので今回は、先ほども申し上げましたように、これからのポピュニズムの時代  
を乗り越えていくために我々は公民館を通して何を培っていけばいいのかとい  
う「これから」のお話を中心にお話しさせていただきたいと思います。

まず、大きなお話として「教育は何を求められているのか？」ということですが、  
詳しいことはお手元の「資料1 (P1)」をご覧くださいと思います。こ  
こに書かれていることが世界の国々の約束です。

国連総会で「世界を変えるための17の目標」、我々の業界では英語の頭文字を  
とってSDGs (エスディー・ジーズ) と呼ばれているものなのですが、これは

2016年から2030年の15年の間に世界の国々が協力して達成しようということで合意したものです。例えば目標1には「貧困をなくそう」と書いてありますが、これら一つ一つを解説する時間はございませんので、後で国連のサイトまたは、外務省のサイトにてご自身でご確認いただければと思います。

このように地球レベルでの課題を解決しようとしたのは今回で二回目で、一回目は2000年にこういうことを決めています。ミレニアム開発目標として21世紀の15年かけてこれらの問題を世界レベルで解決しようとして合意しましたが、残念ながら達成できなかったものがたくさんありました。

例えば、世界の全ての子どもたちに義務教育をできるようにしようといったようなものがあります。先日、日本の大阪の女子中学生の母親がタレント活動を優先させて中学校に通わせなかったとして書類送検されましたが、義務教育というのは日本ではやるのが当たり前のことです。ですが世界レベルで見ると、まだまだ義務教育を受けられない子どもたちがたくさんいます。

ということで二回目の今回、また17の目標とターゲットの中にこの義務教育の項目が入っているわけですが、このような非常に大きな目標が私たちの生活にどうつながるのかと考えた時に、一つ大きなヒントがあると思います。

1985年に発表されたユネスコの学習権宣言の冒頭の一部に「学習権とは読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し、創造する権利であり、自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利であり、あらゆる教育の手だてを得る権利であり、個人的・集団的力量を発達させる権利である。学習権は未来のためにとっておかれる文化的ぜいたく品ではない。それは生存の欲求が満たされたあとに行使されるようなものではない。学習権は、人間の生存にとって不可欠な手段である。」とあります。

つまり、困難な状況に直面している人こそ学習をしなくてはならない、まず学習が先なのだということを言っているのです。これはただの理念のように聞こえるかもしれませんが、実際に紛争や貧困やいろいろな問題が起こった時に人々はまず、学ぶことから始めるべきなのだということは非常に正しいことだと思います。

皆様、新聞の記事やニュース等で耳にしているかとは思いますが、今、学習支援の輪が広がっております。子ども食堂は非常に有名ですが、もう一つ限定的ではありますが、NPOが補助金をもらいつつ、貧困家庭の子どもたちに対して塾のようなものを開いて学習支援を行っております。

これはとても大変なことです非常に効果的だと思います。実際にお話しを聞きますと、待っていればいいというものではなく、子どもたちの家に赴き、何度も何度も通ってお話しをするということをNPOのスタッフや市民が行うこと

によってようやく実現できています。そういう環境にある子どもたちにとって、そこで学ぶということは人生において絶大な意味があると思っております。

先日、埼玉市でもこのような基調講演を行いました。埼玉市では県内 78 か所で元教員等が中心となり、県の受託を受けて学習支援を行っております。数年前には 10 か所にも満たなかったのですが、近年急速に増えて、現在ここまでの数に広がりました。基本的な枠組みといたしましては、貧困家庭の中学三年生に対して声掛けをして、高校入試のための受験勉強を一から始めるというもので、実際にそれをきっかけとして、多くの子どもたちが高校に進学できるようになっています。やはり、今の時代の日本において中学校卒業後、高校に行けるかどうかというのは大きな問題で、まさに学ぶということ、その機会を得られるかどうかということが、人々の幸福それからの人生に大きな影響を与えるということがこの事例からもよくわかると思います。

先ほど、申し上げたように、今、教育に求められていることは、まず第一に学ぶことそのものを全ての人たちに保障していくこと、その文脈の中で社会教育や公民館も考えた方がいいだろうと言うことが、まず最初に私が皆様に申し上げたいことです。

さて、ここからまた基礎的なお話をさせていただきます。社会教育・生涯学習とは何なのか。教育基本法にある条文の抜粋ですが「第 3 条（生涯学習の理念）国民一人一人が、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」そしてそのために「12 条（社会教育）国及び地方公共団体によって奨励されなければならない。」そして、「国及び地方公共団体は社会教育の振興に努めなければならない。」とあります。

第 13 条（学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力）には「地域住民その他の関係者は、相互の連携及び協力に努めるものとする。」とあります。

こういったところが社会教育・生涯学習に関わり、教育基本法に書かれている規定です。

そしてもう一つ、社会教育法があり、その第 2 条（社会教育）に「主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーションの活動を含む）をいう。」という社会教育の定義が書かれています。

社会教育は世界中にあると思われませんが、社会教育という呼び方・捉え方は日本固有のものです。こういったものが公民館や社会教育の根拠になっていることをご理解いただければと思います。

さて、そろそろ公民館のお話に入っていきたいと思えます。

皆様お手元の資料、P12 表 2 をご覧になっていただきますと、1955 年から 2008

年の公民館の数と図書館の数を比較してあります。この資料は月刊社会教育という雑誌に「『ふるさと』を取り戻す社会教育の役割」というタイトルで私が書いたものですが、いろいろな意味で皆様にとっても私にとってもこの多摩地区はふるさとだと思えます。「ふるさと」というのは生まれ育った場所、終のすみかも含めまして、ずっと生きていく場所のことを「ふるさと」と呼ぶのだと思えます。

「峠の我が家」という歌がございますが、これは「ふるさと」の情景を歌っていると言われていています。英語詩では「Home on the Range」というタイトルなのですが、この「Home」というのが実は日本人が考える「生まれ育ったふるさと」とは違うのではないかとされています。それはどういうことかと申しますと、日本人にとって「ふるさと」というものは、生まれ育った所から都市部に学びに出たり、働きに出たりして一時離れたとしても、やがては錦を飾り帰る場所として位置づけられています。しかし、アメリカ人の考える「Home」というものは、自分がずっと生活する愛着がある場所のことを「Home」と呼ぶのだというふうに説明されています。

これの何が大事かと言うと、「ふるさと」というものは生まれ育った場所として愛着を持ってもいいが、今、自分が生活しているこの場所にどう愛着を持つかということが非常に重要なのだということをご理解いただければと思います。

資料にありますこれらの表は、そういった話を下敷きにしながら、元々の「ふるさと」も含めまして、地域はどうなっているのかということ調べた結果です。

例えば表 1(P11)を見ますと自治体の数が急速に減っているということがわかります。これは平成の大合併までに政策的に市町村の数を減らそうとした結果だと思えます。地方から出てこられた方は、自分の町が他の町と合併されてなくなってしまったという方もいらっしゃると思えます。

その中で何が起こったかといいますと、先ほどの表 2(P12)をご覧くださいまして、1999 年をピークに公民館の数が減っていることがお分かりになるかと思えます。公民館は自治体ごとに設置されているので、自治体が合併するのに比例して、公民館の数も減っていくという構造になっているのです。悲しいことに、公民館の数はこれからもどんどん減り続けると思えますが、自治体の数が減れば施設はみな減っていくのかというと必ずしもそうではありません。図書館のように増えている施設もありますし、増やそうと思えば増やせるものだと思います。これが一つのポイントです。

そして実は公民館と同じような運命を辿っているものがもう一つあります。それは学校です。学校の数も自治体の数と比例して急速に減っています。これは人口、あるいは子どもの数が減っているからだと思われるかもしれませんが、実は子どもの数と学校の数は綺麗に相関するわけではないのです。むしろ、自治体が

合併し、学校の統廃合が進むからこそ、結果として学校が地域からなくなっているのです。地方から出てこられている方の中で、今はもう自分の母校がなくなってしまうという方もいらっしゃると思います。

このような現状を踏まえまして、私は学校と公民館はかなり似ていると思っています。自治体が合併し、結果として学校と公民館は減っていく。このことが何を意味するかというと、人々が繋がったり、学んだりする場が地域から失われているということの意味します。したがって、学校や公民館を地域の中にどう残していくのかということが、それぞれの地域にとって大きな課題になってくると思います。特徴だけを捉えた乱暴なお話になってしまいましたが、お手元の資料には今のお話をもう少し丁寧に書かせていただいた文章がございますので、後でそちらをご一読いただければと思います。

ここで「社会教育生涯学習ハンドブック」という資料集にあります、三多摩テーゼというものについてお話させていただきます。この三多摩テーゼというものは東京都教育委員会が出した公文書で公民館づくりのモデルとなった考え方です。多摩地区はもちろん全国の公民館がこれを元に作られたといっても過言ではありません。その三多摩テーゼには四つの役割とその役割を果たすための七つの原則があります。

#### 【四つの役割】

- 1、公民館は住民の自由なたまり場です。
- 2、公民館は住民の集団活動の拠点です。
- 3、公民館は住民にとっての「私の大学」です。
- 4、公民館は住民による文化創造のひろばです。

#### 【七つの原則】

- 1、自由と平等
- 2、無料
- 3、独自性
- 4、職員必置
- 5、地域配置
- 6、豊かな地域施設
- 7、住民参加

この三多摩テーゼの原則を生かして、我々はどのように公民館、社会教育を考えていけばいいのかということこれからお話したいと思います。

私はこれらの原則に加えて、「学社一体」という原則を新しく作ったらどうかと思っています。「学社一体」の原則とは、学校と公民館は地域のつながりと学びの拠点であるという前提のもと、学校と公民館を徹底して守るということです。そしてこの二つの機能を活かしながら、または合体しながら地域を活性化させる・存続させるという考え方です。この学社一体のお話をいたしますと、学校教育と社会教育は違うのだという批判をちょうだいすることがございますが、私はやはり、公民館は学校と一緒に守っていくべきだと思っています。

2016年の4月に教育委員会制度が大幅に変わり、以前は四年だった教育長の

任期が三年任期に改正されました。これは市長が任期中に意中の教育長を任命できるように三年にしたと言われていています。教育長が四年任期のままですと、市長は、前市長が任命した教育長とほぼ四年間、一緒にやらざるを得なくなります。それがいいか悪いかは別として、教育長の任期を三年にすることによって、市長が直接、教育長を任命できるようになったということです。

この改正のポイントは三つあります。

一つは教育行政に対して、市長の権限が強くなったということです。今までは教育行政の自立性ということで、市長が教育委員会に直接関わることはありませんでしたし、市長は教育委員を任命するのみで、教育長はその教育委員の互選で決まっていた。しかも教育委員会の責任者は教育長ではなく、教育長とは別に教育委員長という方がいらっしやったのです。現在は教育委員長はいないので教育長が最高責任者になります。

二つ目は総合教育会議という組織を設けるようになったということです。総合教育会議というのは市長が座長となり、教育長・教育委員で構成される会議です。この議会により、市長が教育行政に対し、会議の場で直接指示できるようになりました。かつてこういうものはありませんでした。

そして三つ目は、その総合教育議会でいろいろな教育問題を教育委員会とは別に議論する中で、教育大綱というものを各自治体が定めなくてはならなくなったということです。

この三つが大きな改正点でして、このポイントを踏まえ、何が言いたいのかと申し上げますと、つまり昨年4月以降、教育行政に関して市長の発言権が絶大になったということです。逆を言うと、市長を通じて予算・条例を提案できますので、望むような教育政策を実施していくことができるようになりました。まさに市民の皆様がどういう市長を選ぶかによって、教育行政が大きく左右されるようになったということをご理解いただければと思います。

そういう流れの中で、社会教育や生涯学習の政策等はどうなってきたのか。

資料(P4)をご覧くださいますとたくさん文章が書いてあると思いますが、ポイントだけご説明させていただきたいと思います。

一昨年の12月21日、文科大臣が諮問したことに対する中央教育審議会の三つの答申の一つに「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」というものがあり、その中で「学校支援地域本部や放課後子ども教室等の施策を担当する社会教育担当部局との連携・協働体制の構築が不可欠である。」とあります。さらに「総合教育会議を積極的に活用しつつ、部局横断で子どもの育ちを総合的・一体的に支援する体制を構築していくことが重要である。」ともあります。

この答申がどのような形になったのかというと、学校教育と社会教育はそれぞれ別にあると思われていたものを、社会教育の中に地域学校協働活動として位置づけたのです。これは、地域の人たちが学校に協力する・支援するという枠組みがなによりも必要なのだというふうに変化しているということなのです。こういう答申がでて、それが政策化されているということ、つまり今まで学校教育と社会教育は別だと思っていたものが、社会教育の仕事の中に学校の支援というものが入ったのだということを感じておいていただければと思います。

そして、注目される教育政策の動向といたしまして、先ほどの中央教育審議会の答申の残り二つ、「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」というのを受けて、前の文科大臣がこの政策をどう具体化していくのかという行程表を出しています。この馳プランとも呼ばれる行程表にいつ、なにをするのかということが五年計画で書いてあり、これに基づいて文科省は予算要求しています。この行程表に載っていないものに対しては予算がつきにくく、また社会教育に関しても、この行程表を無視して行うというのは非常に難しくなっています。こういう政策の行程表を利用しながら社会教育政策を進めていくことが大事だということです。そして、そういう中でこれからの公民館はどうあるべきかというお話をしていきたいと思っています。

私は「模索する公民館像、三つの進化系」というものを考えております。これも研究者仲間からはあまり評判がよくないのですが、私はこれからは、三つのタイプの公民館ができる可能性があると思っています。

まず一つ目は「EX 公民館」という今までの公民館にはないタイプの公民館です。全国でも公民館活動で有名な町が、統合された高校の空校舎を利用して、産業振興センターといろいろな大学のセミナーハウス、そして地域の研究拠点としての大学、この三つを作りたいという構想を持っていました。つまり産業振興・大学のセミナーハウスまたは研究所・独自の大学院大学この三つを統合して、それを結ぶように公民館を作ったらどうかという考え方です。こういった公民館は今までに存在しないのですが、それは何故かということ、日本の社会教育の決定的な弱点は高等教育との結びつきが極めて弱いというところにあるからです。例えばアメリカやイギリスの大学では自由に出たり入ったりできますし、働きながらも学ぶことはできますが、日本の大学ではなかなかそうはいきません。そういう意味で言うと公民館をこれらの高等教育機関や産業振興機能と一緒に作ってしまうというのは斬新なアイデアなのです。しばらく実現はできないとは思いますが、今までのコミュニティ型の公民館を超えた公民館というのが一つ、考えられるだろうということです。

そして二つ目が「市民立公民館」。これも実は頓挫してしまっているのですが、理論上わかることだと思います。公民館というのは、社会教育法で設置主体が二つに限定されています。一つは皆様が公運審委員などをやられている市町村で、市町村自治体が公民館を設置しています。私がお話しをさせていただく時には、国立公民館はないのだというふうに皆様にご説明します。都道府県立も国立も公民館は作れません。それは社会教育法に「市町村が設置する」と書いてあるからです。

ところが、営利団体ではない公益法人は公民館を作ることができます。ということは、条件が許せばこれからNPOや民間団体が公民館を作るという可能性があってもいいのではないかと思います。しかしそれだけでは、公民館は決して儲かるものでもございませんし、誰も好き好んで公民館を作ろうとは思いません。そこで少し捻りを加えまして、かっこよく聞こえるように「市民協働の学校」という名前をつけて提案したのですが、これもあまりうまくいきませんでした。ですが理論上はNPO立公民館というのは可能性があると思っています。

ただ一つだけ、私が館長や公民館職員の皆様に言いたいのは、これを盾にして今ある市立公民館を民間委託するのだけはやめていただきたいということです。今あるものは存続させた上で、新たにもう少しきめ細やかな市民の学習の場として、NPO立公民館という考え方があるのだということを申し上げたいと思います。

そして三つ目が、「地域開放型学校一体型公民館」です。学校と他の公共施設との複合化検討部会というものが文科省に設置されており、そこでいろいろな報告を出しています。

新潟県にあります聖籠中学校と埼玉県志木小学校は公民館という看板は掲げていないものの、学校と公民館を事実上、一体化させた学校です。志木小学校は門から入って左側半分が学校、右側が図書館兼公民館となっています。残念ながら今は公民館という看板を下ろして遊学館という名前に変わってしまったのですが、学校と公民館が一緒になっています。

ここは子どもたちはもちろんのこと市民も入ることが可能で、ガードマンがいなくらい安全です。なぜかという門から入って階段の上には入口があるのですが、二階がエントランスになっておりまして、そこでいきなり「おはようございます」と公民館に来ている市民の方に声をかけられます。ボランティアでやられている方もいるのかもしれませんが、このことの何がいかと申しますと、学校の敷地内どこにいても大人の目があるということです。不審者の入って来ようがありません。学校に出入りしているいろいろな大人たちが皆知り合い同士、そして学校の先生も子どもたちの顔も皆知っているということは極めて安全なこと

なのです。

ちなみに、千葉県習志野市に秋津小学校という学校があります。この秋津小学校もこれほど本格的ではないものの、空き教室を利用して地域の人々が学べる「秋津コミュニティ」と呼ばれる場所があります。そこを作った方のお話を聞く機会が何度かあったのですが、実は秋津地区は習志野市の中でも二番目に犯罪発生率が低い所だということです。これは何故かと申しますと、小学校の中に地域の人たちのたまり場があるために、住民がほとんどの小学生と顔見知りだからです。どこにいても子どもたちの顔がわかっているため、声掛け・見守りができる、つまり学校の敷地内だけが安全なのではなく、地域全体が安全ということなのです。ハードな問題としてこういう仕組み・考え方が非常に合理的だということです。

また、私は「学社一体型公民館」というものも提言し始めておりまして、三つの提言がございます。

一つは学校区を基礎単位とした「学社一体」型地域教育の推進体制の整備をした方がいいだろうということです。

私は社会教育の研究者で、職場も住んでいる所も府中なのですが、その府中の教育委員会に頼まれて学校評価委員というのを八年間担当しております。三・四人でチームをつくって複数の学校をまわっており、今は中学校一つと小学校二つを担当しています。年に二、三回学校を訪問して、校長先生から学校の経営方針をヒアリングしたり、授業を見学させてもらったり、意見交換して最後は学校の経営診断書を出します。こういうことを八年やっているものですから、だいぶ学校に詳しくなりました。

しかし、そういう専門家だけではなくて、もっと地域の人たちが積極的に学校の経営やいろいろな問題に関わっていった方がよいのではないかと考えております。立川市の市長や教育長にも提案させていただいたのですが、学校評価を行うということはいい学校支援に繋がると考えております。そしてそれはまさに答申でも言われていた、政策的に作られようとしている地域学校協働本部を進めていくことにもなるだろうと思います。

そして、二つ目は「学社一体」型地域教育の基盤となる地域開放型学校（複合化）の整備、これは先ほどの志木小学校に関わることです。

おそらく、どこの自治体でも公共施設の更新計画というものを出していると思いますが、今、多摩地区のほとんどの自治体は、たくさんの公共施設を改修しなくてはならなくなっています。

その中で立川市でも総合劣化度と施設重要度の優先度を一から四まで決めています。現在、立川市に公民館はないのですが、地域学習館という名前に変えて建物自体は残っています。そこで、立川市が出した公共施設保全計画の表を見て

みますと、この地域学習館はずっと下の方に出てきます。これは耐震度の問題ではなく、優先度が低いと見られているからです。逆に頭の方には何が出てくるかという、全部学校なのです。これはお金がない中での施設更新は学校の方が合意を得やすいということがあるからです。

結果、何が言いたいのかというと、まず世の中の政策の動きは学校教育と社会教育を分けるのではなくて、むしろ積極的に統合する方向になってきているということ。そして、公民館を始めとした社会教育施設の更新の問題について、我々が公民館・社会教育施設は大事だと唱えても、残念ながら、なかなか更新はされず、下手をすれば老朽化が進み、建て替えられないのでなくしてしまおうと押し切られてしまう可能性があるのだということ。

では、この二点を踏まえて我々は一体どうしたらいいのか。私が皆様にオススメしたいのは、積極的に学校の中に公民館を作ろうと提案する手があるのではないかと考えています。実はこれは行政にとっても非常に合理的な話なのです。学校は更新しなければならない、しかし学校を地域から切り離してしまうのは、社会教育の力を借りて地域で学校を見守って支えていこうという政策動向と違ってしまふ。この文科省の政策動向に乗っからないということはすなわち、評価されないということです。

そしてなによりも財政問題があります。皆様の自治体の中には市民が財政白書つくるという運動や講座をされているところもあるかと思いますが、行政とは別に市民が財政分析を始めるといろいろなものが見えてきます。

その中で私がオススメしたいのはやはり、大人の学び場、あるいは町づくりの拠点を学校とセットにして守っていくということを進めていく手があるのではないかと考えています。これが実は財政的にも合理的な方法なのです。

三つ目は、多摩地区にはたくさんの高等教育機関があります。ところが、先ほど申し上げたように、公民館含め日本の社会教育は大学等との連携をつくるのが下手なのです。下手と言いつつながら、我々、講師がこういった公民館等でお話をさせていただいているわけですから、一体何を言っているのだと思われるかもしれませんが、しかし実は、組織として公民館あるいは社会教育が、大学と結びついていくという枠組みが、現状では、なかなか持っていないのです。それは大学側の責任でもあるのですが、大学は大学生の教育をするのがまず中心にあり、教員は研究をするということが仕事です。自治体で作った大学は違うのかもしれませんが、社会貢献というものは、なかなか評価されなかったのです。私が務めているところも国立大学ですが、国立大学が地域に貢献しようとしても、それ自体はあまり評価されませんでした。

ところが今、世の中が変わってきています。それはどういうことかということ、

資料（P6）「大学 - 自治体間連携協定及び連携組織の充実」とありますように、こういった連携等の結びつきを作る動きが急速に広まってきているのです。

また国立大学を例に挙げますと、国立大学は独立行政法人になっておりまして、国立大学は六年間で一つの区切りとする中期目標・中期計画というものを文科省に届けることになっています。ちょうど二年前、各大学は、これからどういうタイプの大学になっていくのか、三つの中から選びなさいという選択を迫られました。

第一類型は地域貢献型というふうに呼べます。これは地域の大学として積極的に地域の人材育成を行うということです。現在、全国の国立大学は 80 校ぐらいありますが、半分ぐらいの大学はこの地域貢献型を選んでいきます。

二つ目、私はエキスパート型と呼んでおりますが、日本国内もしくは世界で、一つの領域において非常に専門性が高い、専門に特化した大学を作りなさいということです。これもだいたい三分の一ぐらいの大学がこの類型を選んでいきます。

そして残りの第三類型はグローバル大学です。簡単に言えば、世界の百大学の中に入りなさいということです。今、大学は国公立問わず、世界レベルで競争しています。英語論文の数がどれぐらいか、またはどれぐらい研究資金をとってきているか、どれぐらいたくさんの留学生を入れているか等、そういうことが露骨に評価されます。ちなみに私が勤めております農工大も、このグローバル大学を選びました。このように全国の 16 大学がこのグローバル大学を選んでおります。

以上、三つの類型についてご説明いたしましたが、私が申し上げたいのはそのタイプについてではなく、地域型を選んだ大学が半分あるという事実なのです。当然、地方大学が多いのですが、つまり大学の方でも地域と結びついて貢献しようという流れが一つ大きなトレンドになってきています。地域貢献が評価されるようになったのだということです。私はそこに目をつけない手はないと思います。

先ほど、「農工大はグローバル大学を選んだ」と申し上げましたが、農工大の農学部は立て続けに三つの自治体と連携協定を結んでいます。

一番最初は副市長が農工大の OB だった所沢市、二年前に長野県の飯田市、そして数日前に福島県の郡山市とそれぞれご縁があり、連携協定を結びました。

このことからわかるように、グローバル化を選んだからといって、地域と一緒にやらないということではないのです。今、高等教育機関である大学は地域に目を向け始め、協定を結ぼうとしているのです。

公民館が非常に有名な長野県飯田市を例にとりますと、この地域には私立短大はあるものの四年制の大学はありません。そして大学がないということは地域にとって非常に不利なことなのです。その中で飯田市は何をやったのかというと、

飯田のホームページに、全国の大学の名前がずらっと書いてあります。さらに見ていきますと「学輪 IIDA」という名前の連携組織があることもわかつて思います。飯田市は年に一回、これら記載にあります大学の研究者を招いて、これからの飯田の課題についてどう思うのかという報告会をしています。飯田市には四年制大学もなく、講演料を払っているわけでもないのに、これだけたくさん全国の大学と連携協定を結び、おまけに学輪 IIDA という組織まで作って、紀要のような研究報告を毎年作っています。そしてそれらを地域のいろいろな施策に活用しようとしているのです。大学側でのお話にはなりますが、こういうことからまさに、学校教育と社会教育を別々にやるという時代は、もう終わりを迎えているのではないかということをお願いしたいと思います。

今、公民館や社会教育を取り巻く状況は決して明るくはありません。20 年以上前から続くこういった状況の中、この局面を乗り切るために何が必要なのか。私が皆様に申し上げたいのは、この「学社一体」という小中高、大学を含めた学校教育と積極的に連携・協力するという公民館の在り方・考え方をぜひとも検討していただきたいということです。最後にそのことを申し上げまして、私の基調講演は終わりにさせていただきます。

皆様、長い時間ご静聴ありがとうございました。



# 課題別集会

## 第1 課題別集会 高齢者の学びと講座づくり

### 1 課題別集会担当市（小金井市）挨拶

#### (1) 討議内容説明

超高齢化社会と言われて久しい現代。65歳以上の割合が2025年には人口の約30%、2060年には約40%を占めると言われ、今後ますます社会における高齢者の割合は増加すると予想されます。

各自治体では、高齢者が充実した日々を送れるよう幅広く活動し仲間づくりや地域づくりを行う目的で高齢者向けの講座を開催しています。小金井市は「高齢者学級」として公民館各館で実施しておりますが、昭和58年開設以来、何十年もその形態は変わっていません。しかし、時代や社会情勢も変化し、市民からも多種多様な要望がある中で、新しい高齢者学級のあり方を検討することが必要であると考えます。時代や社会情勢の変化、超高齢社会に対応した高齢者の学びや講座づくりについて、各市の現状と課題について事例を交えながら考えます。

#### (2) 資料確認

#### (3) 第1 課題別集会の流れ説明

#### (4) 助言者、発表者紹介

- ① 助言者 首都大学東京健康福祉学部看護学科准教授 飯塚 哲子さん
- ② 事例報告者 立川市砂川学習館係長 小山田 久さん
- ③ 事例報告者 調布市西部公民館専門嘱託員 川上 美砂さん
- ④ 事例報告者 小金井市公民館東分館長 鈴木 浩一さん
- ⑤ 事例報告者 小金井市公民館貫井北分館長 村山 孝一さん

### 2 仲間とつながる地域とつながる高齢者の学びと講座づくり（助言者講話）

#### (1) 自己紹介

##### ① これまで公民館でお話してきたテーマについて

実践から考える高齢者が「学ぶ」ということ

##### ア．東京都荒川区

人と地域がつながる「荒川ころばん体操」

首都大学東京教員と荒川区民の連携により、健康体操の考案および普及を行っています。それにより、高齢者が地域へ出て行くことや地域とつながることのきっかけとなっています。

##### イ．東京都足立区

地域ぐるみで糖尿病予防メニューづくり

地域ぐるみで飲食店や学食で扱う食を見直すことで、地域ぐるみでの生活習慣病の予防を推進しています。そのため、足立区北千住エリアなどでは高齢者が学食などで食事をする姿を目にすることができます。

ウ．埼玉県所沢市

地域を創造する健康情報誌「定年ジャンプ」

高齢者自らが地域を創っていくための第一歩としての情報誌を発行しています。

エ．絵本から考える、いのちとつながる

オ．体験・職業を通して考える、いのちの現場から

看護やターミナルケアを通して出会った現場から感じたことなどを伝えています。

(2)最近の話題から－高齢者の定義見直しの動向－

① 高齢者定義の引き上げ

65歳から74歳は準高齢者、75歳以上は高齢者と提言。

② 高齢者を取り巻く状況

単に年齢的・身体的・知的能力の若返りの側面ばかりをあぶりだすのみでは不十分だと思います。年齢を重ねるごとにさまざまな経験をし、そこから与えられるストレスについて考慮し、身体面だけでなく、社会面、心理面というところへの目を向けて理解する必要があると考えます。

(3)「もつ」ことから「ある」ことへ

まずは当事者である高齢者とつながる

① ひとつの手がかりとして「もつ」様式から「ある」様式へ。

「もつ」ということは、財産や能力などを所有することに専念してしまう志向で、そのことが自分の安心感のより所となります。それ故に、命についても持っている状態であり、失うことへ思い煩うことにつながる状態です。

「ある」ということは、財産や能力がそこに「ある」ことと考え、これらを能動的に発揮して喜びが確信できるような志向です。そのため、命についても「ある」ことであり、「ある」ことについて積極的に評価し、その意味を自己に内在化させていく状態です。

ア． 伊藤一彦氏編「老いて歌おう」選歌集紹介

イ． 藤川幸之助著「徘徊と笑うなかれ」紹介

#### (4) つながるということ

##### ⑥ 仲間とつながる 地域とつながる

東京都荒川区あらかわころばん体操の実践から

##### ⑦ 生・生命・いのち・死とつながる

ア. 短歌を手がかりとして

いのちを詠んだ短歌を紹介します。斉藤茂吉さんの短歌では地域の中から見えてくる死を扱っていますが、中埜由季子さんの作品では、手術室など近代の、地域と離れたところにある死を詠っています。このようなところにも地域が見えにくくなっている時代を象徴していると感じます。

イ. 歌を手がかりとして

生きるというそのものを肯定する、謳歌する歌として、「アンパンマン」の歌が考えられます。また、作者のやなせたかしさんの文章では、命そのもの、それがあつたということの大事さを教えてくれていると感じます。

#### (5) 高齢者の暮らしと地域がみえる－今回の事例－

新しくて、古くて、新しい課題が公民館の高齢者学習、高齢者事業

##### ① 入口の部分

高齢者学習、高齢者事業にどうやって来てもらうか。

##### ② 出口の部分

終了後、自分たちで自主的な何かをすることができないか。

#### (6) むすびにかえて

① 高齢者だから支えられている、ではなく逆に高齢者に支えられるような関係や高齢者自身が社会を支え、地域を創造していくといった視点を入れてこれからの事例報告を見ていただければと思います。

② 学習の主体として的高齢者、高齢者に関する教育活動を行う意味についても事例発表で一緒に考えていきたいと思っています。

### 3 立川市寿教室について（立川市事例報告）

#### (1) 寿教室の概要

① 寿教室という講座を実施しており、50年近い歴史がある

- ② 高齢者の生涯教育の一環として、仲間づくりや生きがいづくりを目的とし、各地域学習館など9会場で月3～4回実施
- ③ 対象は、市内在住の60歳以上で、会場まで自力で通うことができる方



## (2)平成27年度寿教室開講状況

- ① 9会場で実施（6つの学習館＋3つの学習等供用施設の会場）
- ② 会員数が750人。開講日数が延355日。
- ③ 平均年齢は76.4歳。最高齢は97歳。60歳以上から参加できますが、昨今社会状況もあり、比較的後期高齢者の参加が多い傾向にあります。
- ④ 年齢分布は、75～79歳が30.3%、70～74歳が28.0%、80～84歳が22.3%、85～89歳が7.3%、65～69歳が9.3%、60～64歳が1.3%、95～99歳が0.3%となっています。
- ⑤ 内容は、健康体操、コーラス、民謡、フォークダンス、フラダンス、舞踊、気功、学習会などを行いました。

## (3)寿教室の歴史

- ① 昭和45年度に中央寿学院（現柴崎寿教室）にてスタート。
- ② 平成元年度に現在の9寿教室体制になりました。

## (4)立川市寿教室運営要綱

平成28年4月1日施行しました。これまでばらばらだった各教室の体制の共通の項目を定めました。

- ① 入会者は、入会する期間を更新することができます。
- ② 運営委員会を設置するようになりました。入会者の中から互選により選出し、委員長、副委員長、会計及び監査を置きます。この運営委員、会員の方とともに連携して事業を実施しています。

## (5)寿教室の利点

- ① 各学習館の地元の方が参加し、高齢者の社会参加、生涯学習を生かした街づくり、地域の活性化を促進しています。
- ② 健康体操を必修科目にしており、健康増進を図ることにより社会保障費の抑制に貢献しています。
- ③ 継続した事業を行うことにより、高齢者の方の居場所を確保し認知症や孤独死などを防ぐ役割となっています。

## (6) 寿教室の課題点

### ① 対象者が重なる類似事業との差別化

他部署の事業と類似している部分が多く、差別化が必要となっています。

### ② 会員の高齢化によるプログラム工夫の必要性

平均年齢も70歳以上であり、80歳以上の方もOKとなっています。そのため、年齢幅が大きく、活動内容のできる／できないに差が出てきてしまっています。そのため、無理なく実施できるように工夫をする必要があると考えています。

### ③ 会員継続できることによるマンネリ化

継続する人が多いため、新規会員が入り込む余地がなかなかない状況です。そのため、今後定員一杯で受け付けられないという状況も生まれる恐れがあります。

### ④ 担当人数が1～2人と少ない

担当者の負担が大きい現状があります。特に、バスハイクなど外出をする企画などはもっと人数を必要としています。

### ⑤ 予算縮小による同レベルのカリキュラムの提供

予算編成が厳しい現状があり、その中でどのように予算を維持していくか、限られた予算の中で同レベルの内容を提供していくかを懸念しています。例えば、平成28年度は寿芸能フェスティバルという発表会を実施したが、司会を職員が行ったり、講師謝礼も一部カットしたりと工夫を凝らして実施しました。

## (7) 今後の方向性について

### ① 技能特技を活用することも含め、地域運営協議会と連携して地域の活性化につなげる

会員でいろいろな技能を持っている方が多いので、その方々に講師や指導者として活動してもらい、より地域の活性化につなげたいと考えています。

### ② 他課との連携で事業効果を高めるだけでなく、認知症や孤独死などの課題に対応できないかを模索する

相互に連携することでより効果を高められないかと考えています。例えば、福祉関係部門やスポーツ関係部門など。

### ③ いかに活動場所を確保し高齢者自身に運営を担ってもらっていくかを考える

さらに高齢者の居場所となるために、高齢者の方自身で運営を担ってもらうように工夫していきたいと考えています。

## (8) 質疑応答

① Q：バスハイクについて、参加者の負担はあるのでしょうか。

A：おおむね5千円から6千円の負担をいただいています。

② Q：寿教室について、市全体の広いエリアを対象としているのか、それとも例えば寿町みたいな限ったところで実施しているのでしょうか。

A：基本的に各地域で教室があります。現在9寿教室があり、6つについては各地域にある学習館で実施しています。3教室については学習等供用施設で実施しています。

③ Q：老人会とは別でしょうか。

A：老人会とは別です。老人会は別に存在しています。

④ Q：対象として会場まで自力で通うことができる方とありますが、足が不自由な方などへの配慮や援助は考えていますか。

A：送迎とかはやっていないですが、多少足の不自由な方も参加されています。体操などの動くことを目的としたカリキュラムなどは参加なさらないなど状況を見て参加してもらっています。介助をしていただく方がいらっしゃる場合などで軽度の認知症の方の参加も受け入れています。

## 4 学ぶ門には福来る！地域で生きる豊かさを求めて（調布市事例報告）

### (1) なぜ、このシニア講座を企画したのか

① あるシニア女性の言葉から

利用者のシニア女性から「シニアの連続講座を行ってほしい」と直接伝えられていました。

② 高齢化する利用者に対しての思い

高齢者の利用者には、仲良しだけど内向きな“サークルの利用者”と知的好奇心に溢れているが、その場かぎりにつながりづらい“講座の参加者”という2タイプがいることが気になっていたことから、その垣根を低くしたいと考えました。

③ 地域から離れて晩年を過ごした「父」の姿

自宅から遠い有料ホームで最期を過ごした父を見て、ほんとうは地域で全うしたかったのではないかとの思いが残りました。

以上、3つを元に、シニアひとりひとりにエンパワートメントしてほしい、新たな発見とつながりを得てもらいたい、調布の町に暮らして良かったと実感してほしいという想いで、企画をしました。

### (2) 「シニアの笑顔と真剣さ」を実感した1年目（2014年）

6回連続講座。予算は3万4千円。

① 調布のジオラマを囲んで話そう

昭和30年代の調布駅周辺を再現した立体模型を囲んで、製作した団体の方を招いて話を聞きました。懐かしい話や新しい発見があり、大変盛り上がりました。

② シニアをサポート・高齢者福祉について知ろう

③ 鍼灸マッサージ師から学ぶ、自分でできる身体のケア

シニアの方々の真剣なまなざしを見て、健康志向の切実さを感じました。

④ “思い出のアルバム”の歌発祥の地と武者小路実篤記念館見学（館外学習）

「こんな場所があったのね～」という声がたくさん挙がり、長年住んでいる町のことで案外知らない方が多いのだと感じました。

⑤ 児童養護施設・二葉学園と子どもたちのことを知ろう

すぐ近くにある施設でしたが、参加した全員が立ち入るのは初めてで、現代の子どもたちの厳しい状況と職員の働きに驚きの声が挙がりました。

⑥ まとめの話し合い

(3) 「休みたくなと思う講座」をめざした2年目（2015年）

1年目と同様に6回連続講座。

① 身体を整えてアクティブシニアをめざそう

高齢者施設で長年健康指導をしている講師の話は具体的でわかりやすいものでした。

② 映画大好き～調布シネマクラブ会員の話を聞こう

調布は映画のまち、ということで市民団体に来てもらい映画の話をしてもらいました。映画好きシニアのいきいきとした姿からの刺激を受けました。

③ 考古資料をもとに、いにしへの調布に思いを馳せよう

調布市郷土博物館へ行きました。参加者の7割近い方が1度も行ったことがなく、市の施設でもまだ遠い存在であると感じました。

④ 武蔵野の雑木林のルーツを見に行こう（館外学習）

次第に失われつつある武蔵野の原型を見学。講師の解説付きで学習しました。

⑤ 自分事としての認知症～“包括さん”に聞いてみよう

前年の傾向から認知症に対する関心は高いと考え、内容に組み込みました。

⑥ まとめの話し合い

今後も学習を続けたいという声が多く出ました。

担当者として、子育てに関する講座との共通点を多く感じました。

ア．初めは人見知りで遠慮がちですが、笑いや涙があって共感が安心を生むこと。

イ．参加者同士の多様な意見や感じ方の違いに興味が湧くようになること。

ウ．参加者同士のやりとりからつながりや一人ひとりの変化が生まれること。

そのことから、講座の中で「関わりあいをいかに多様に作るか、互いに学びあえる場面を工夫すること大切」と気付くことができました。

#### (4) 「地域で生きる豊かさ」を求めての3年目（2016年）

全5回の連続講座

① 身体を整えてアクティブシニアをめざそう

② 粹なシニアのためのカラー入門

最初男性は戸惑っていたが、色による違いを実感すると歓声があがり、盛り上がりました。

③ 安心のために在宅医療について、西田先生に聞こう

訪問診療をしている身近な開業医に、様々な疑問に答えてもらいました。

④ もっと調布を知ろう、“ここあ”と“カフェaona”

去年の児童養護施設での関心の高さから、調布市で始まった子どもの学習支援、居場所づくり、若いお母さんたちの居場所をつくる活動を知ってもらいたいと実施しました。

⑤ 大切な人を喪うということ～新たな生きかたを求めて

悲しみから立ちあがった体験談を聞き、真摯な生き方に、満席の会場の空気が凜と澄む貴重な時間でした。

#### (5) 講座から誕生した高齢者学級「チャレンジクラブ未来」

① 2年目終了時、これで終わるのはもったいないから続けましょうと声が挙がり、サークルが発足しました。高齢者学級で、テーマを持って継続的に学習するシニアのグループです。現在23人。自主学習の内容として、福祉や医療、ボランティア、地域を知ることなどについて学んでおり、2016年は文化祭にも初めて展示の参加をしました。

#### (6) 3年を経て、大事にしたいこと

① 個人のエンパワートメントに向けて公民館らしい内容を参加者同士の多様性、つながりを大切に。

② シニアの不安を減らし、安心を増やす【課題解決の】学びを

実は言葉にしなくても不安に思っていることがたくさんあると気がつきました。そんな不安をひとつひとつ安心に変える、安心を増やす学びを作りたいと思います。

- ③ シニアの真剣さの先にあるものを、公民館と一緒に考えていく  
残りの時間を大切にしたい、身に付けたものを生かしたい、次世代に何かを伝えたい、という潜在的な思いがシニアの方にはあります。その思いを大切にしていきたいと思います。

#### (7) シニア講座のこれからに向けて

##### ① 課題

- ア. 一人ひとりのシニアの方たちの不安を聞き取ることの難しさ
- イ. 一歩が踏み出せないシニアをどう迎えるか
- ウ. 自主グループ化した後の支援
- エ. 担当者として、アンテナとネットワークをどう作るか



#### (8) 公民館だから大事にしたいこと

##### ① シニアの真剣さと笑顔

シニアの方たちの笑顔や真剣さを肌で感じるといい学びを作らなくちゃいけない、作りたいと思います。また、シニアの方が持っているものを次世代に伝えていきたい、それを一緒に探りたいと思います。

##### ② 連携の大切さ～伝える側にも聞く側にも大きな意味

いろんな機関や団体ともっと面白い連携をしていきたいと思います。これは伝える側にも伝えられる側にも意味のあることだと実感しています。

##### ③ 一人暮らしの女性の言葉を聞いて

先日、「孤独死はもう怖くない」と一人暮らしの女性が発言しました。なぜなら、地域に自分を気にかけてくれる人がたくさんできたからだそうです。「怖いのは孤立なのだと思う、講座の中で在宅医療について知って安心できたから、よかった」と発言していました。今後も、そんなふうにも実感してもらえよう地域で生きる豊かさ、地域にこだわり続けたいと考えています。

(9) 最後に

地域に生きる豊かさを求めてと報告のタイトルでつけましたが、公民館のシニア講座はこの言葉に尽きるんじゃないかと思っています。お金があって得られる豊かさ、ものの豊かさではなくて地域でこんなに人とつながりが得られる、まだ知らない学びがある、新しい出会いがある、知らなかった場所に行ける、このような豊かさを生み出す地域へのこだわりを続けていきたいと思います。そして、地域の未来に向けて子どもたちにも関わってもらえるように感じています。

(10) 質疑応答

Q：参加者のリピーター率はどうでしょうか。また、リピーターと新規の方で学びの具合やつながりの隔たりみたいなものはあるのでしょうか。

A：まず、リピーターについて、大体前年の半分が継続し、半分が新規の方が参加する形です。人数が最大35人なのですぐに仲良くなりますよ。また、毎回必ず小さなグループで話し合うような時間を設けていたので壁はなくスムーズに馴染めたと思います。

Q：自主グループとなったチャレンジクラブ未来とシニア講座でコラボなど何かあったのかどうか教えてください。

A：チャレンジクラブ未来は自主グループとなりましたが、高齢者学級とって公民館が支援をしなければならない位置づけとなっています。そのため、私はしっかり関わっています。ただ、あくまでも学びたいテーマはチャレンジクラブ未来の方に考えてもらっています。

Q：調布市内に公民館が3館あり、その中の1館のみでシニア講座を実施しているということなので調布市全体をカバーできてはいないと思いますが、この点について今後どのようになされるか考えがあれば教えてください。

A：（調布市東部公民館長）3館ありそれぞれ連携をしながら事業は行っていますが、東部公民館、北部公民館、西部公民館と地域の特色を活かしながら今後事業展開をしているところです。その中でこのような講座を開催したいと考えてはいますが、担当者の力量などによる部分もありまったく同一のものというのはかなり難しいのかなと考えています。しかしながら、全体としてできるような努力はしたいと考えています。

Q：年代別の参加率や男女比率など教えてください。

A：男女比率は定員35人のうち、10人が男性、25人が女性です。平均年齢は75歳。60代の方は4、5人です。

## 5 高齢者の学びと講座づくり（小金井市事例報告）

### (1) 小金井市は、どんな市？

① 人口 約 11万9千人、60歳以上の高齢者率 約 26%

### (2) 小金井市公民館は、こんなところ

① 市内 5 館。そのうち 2 館は N P O 団体が運営委託を受けています。

② 講座などの企画・運営は企画実行委員会を中心に展開しています。

### (3) 高齢者学級のあらまし

① 昭和 58 年から地域での仲間づくり、高齢者の生きがいある生活を送っていただくことなどを目的に開設されました。

② 5 館それぞれが高齢者学級を実施しています。対象は 60 歳以上、各館での重複申し込みは不可です。

③ 年間で 15～20 回程度の講座を実施し、一般教養、芸術・文化、野外研修などを行っています。



### (4) 東分館の高齢者学級

① “くりのみ学級”（この地域で献上栗を生産していたということから由来）という名称で行っています。

ア. 目的は交流、親睦、仲間作り、居場所づくりです。

イ. 定員は 40 人。

ウ. 対象は 60 以上の市民。平成 28 年度に関して平均年齢は 75 歳で、どちらかというとも 60 歳代前半の方は少ない傾向にあります。

エ. 男女比は、約 1 / 3 が男性、2 / 3 が女性です。

② 学級組み立ての 3 本柱は、趣味教養講座、実践体験、野外研修です。

平成 28 年度は、笑いヨガでの交流や防災に関する講話、トルコ文化センターや醤油工場の見学、相続税や異文化理解に関する話を聞く、などを実施しました。

③ くりのみ学級の成果について

ア. 3 つの柱を元にした講座を行うことで、高齢者の交流と親睦、居場所づくりが図られ、それが健康づくりや生きがい、心の豊かさにつながっている。

イ. 自主グループをつくる人たちも生まれ、継続的に活動しています。

そのため、人と人を結び、人づくりや地域づくりに貢献しています。

④ くりのみ学級の課題について

ア. 新規の方の受け入れ態勢について懸念があります。

平成28年度は定員40人に対して、56人の応募があり、抽選となりました。応募の内訳として、継続が約2/3、新規の方が約1/3でした。

イ. 参加者の年齢が比較的高いです。

平均年齢75歳であり、60歳代前半が少ない現状があります。

ウ. 班活動がやや少ないプログラムでした。

班活動を通じて交流を深めるようにしているが、平成28年度はやや少なかったかと感じています。

(5) 貫井北分館の高齢者学級

① “はなみずき学級” という名称で実施しています。

ア. 参加者の固定化を防ぐことと公民館施設利用団体へ配慮し、毎年開催の曜日を変更しています。

イ. 開催期間の工夫として通年開催を行っています。

学校の要素も含めてできるだけ長い期間の開催をしています。月2回の開催で設定し、5月から翌年3月まで実施します。

ウ. 野外研修や懇親会内容の一部は参加者で協議します。

内容にあらかじめ未定の部分をつくっておき、その部分については参加者と一緒に考えるようにしています。

② 開館1年目（平成26年度）

ア. 開催時期は9月から12月、全10回、木曜日開催

イ. 募集人数は40人、参加者は27人（女性19人、男性8人）

ウ. 参加者の感想として「1週間おきの開催で丁度よかった」「新しい友達と出会えたことが大きな収穫でした」などいただきました。また、人数については丁度よいという結果が多かったです。

③ 開館2年目（平成27年度）

ア. 開催時期は5月から翌年3月、全18回、火曜日開催

イ. 前年度の意見を反映し募集人数は30人としたが、会場のキャパシティを考慮し応募者37人（女性29人、男性8人）全員を受け入れました。

ウ. 参加者の感想として「火曜日が空いていたので参加できた」とあり、曜日を変更して開催することの効果が見れていると感じました。

④ 開館3年目（平成28年度）

ア. 開催時期は5月から翌年3月、全18回、水曜日開催

イ. 募集人数は30人、参加者は36人（女性30人、男性6人）

⑤ 開館4年目（平成29年度）

準備中であり、これまで応募者が多く抽選を行っている館が多いため定員を40人に増やす予定です。

⑥ はなみずき学級の課題

ア. 高齢者が参加する学級であるため体調不良などを理由とした欠席者が多いです。

イ. 体調不良や家庭の事情で参加できなくなってしまった欠員が出てしまっています。

「転入生」という形で追加募集などできないかと考えています。

(6) 高齢者学級のこれから

① 社会教育法第20条、第3次小金井市生涯学習推進計画も考慮し、高齢者が定

的に集まり、学び、交流する場として継続していくことが方向性だと考えています。

② それを通じて、健康づくりのアシストや社会福祉の増進などに寄与できるのではないかと思います。

③ 最終的にはこのような公民館事業が人と人をつなぎ、人づくりや地域づくりへと結びつくと考えています。

(7) 質疑応答

Q：くりの実学級について、班の編成や人数、どういった活動内容をしているか教えてください。

A：10人1組を1つの班とし、それを4つ作っています。1班には男性が2、3人入る形です。活動内容として、野外研修なども班行動を基本として、その他事前の準備活動なども班で行ってもらっています。

Q：はなみずき学級について、開催の曜日を変更することによる苦情などはあるのでしょうか。

A：苦情という形ではありません。参加者からは曜日を変更したから参加できるようになった、などという声をもらっています。一方、例えば変更したことで参加できなくなってしまった方や活動日と学級開催日が重なってしまった活動団体もいらっしゃると思います。ですが、それも毎年変更しているということで公平性は保てるのではないかと考えています。

## 6 第1課題別集会参加者からの発言

第1課題別集会に参加していただいた参加者から、それぞれの関わりある自治体や団体についての高齢者の学びに関する現状を発言していただきました。

## 7 助言者によるまとめ

- (1) みなさんの報告や発言を聞かせていただいて、居場所づくりや認知症を考えるなど、死を前にして生を考えたり生を考えながら死についても同時に考えたりすることが市民権を少しずつ得られてきたと実感します。
- (2) これからますます地域の学習に関わりたいという方はどんどん増えていくと思います。その中で、だれもが学習する権利を持っているということをどういう風に考え、そして捉えていくことがひとつの課題となるのではないかと今回の事例報告から考えました。



## 第二課題別集会「公民館から始める地域づくり」

### 討議内容

公民館は戦後間もなく日本の各地に設置され、地域の人々が集い、学び、産業や文化の振興をすすめるための拠点として大きく貢献してきました。そして今、コミュニティの再生や地域文化の創造など、地域づくりへの新しい取り組みが求められる中で、公民館がどのような役割を果たせるのかが問われています。

以上のような背景をふまえ、この分科会では、①地域づくりに果たす公民館の役割に関する基調講演、②先進的な事例の報告（3事例）を行い、「公民館から始める地域づくり」の可能性を検討します。事例としては、地域課題の解決、図書館と一体化した地域連携、事業に対する住民参画に関する公民館活動を取り上げ、基調講演とこれらの事例報告をふまえて将来展望を描きたいと考えています。

- 日時・・・平成29年1月21日（土）午後0時30分～4時
- 会場・・・福生市さくら会館3階ホール
- 分科会担当市・・・小平市
- 参加者・・・98名
- 助言者・・・田中 雅文氏（日本女子大学人間社会学部教授）
- 事例報告者・・・長谷部 豊子氏（国分寺市公民館運営審議会委員）  
植野 稔氏（小平市立鈴木公民館職員）  
上田 滋氏（小平市立仲町図書館職員）
- 企画運営委員・・・小平市公民館運営審議会委員・小平市公民館職員

### 1. 1 事例報告 「国分寺市立本多公民館の取り組みについて」

長谷部 豊子氏

はじめに、国分寺市は面積11.48km<sup>2</sup>、人口約120,600人（H28.12.3現在）、新宿には中央線で30分、地理的には東京都の中心に位置しています。小学校10校・中学校5校が配置されています。国分寺市の公民館は、中学校区に1館で5つの地区独立館として配置されています。平成27年度から公民館運営審議会が1本化され、それに伴い、各館では「公民館サポート会議」が設置され、運営や課題について審議されています。

#### （1）本多公民館地域会議の取り組み

2000年（平成12年）の国分寺市立本多公民館運営審議会では、完全学校週五日制に向けて「子どもの居場所づくり」について審議し、「市民に期待される公民館事業～公民館と青年について」の建議を提出しました。2001年7月夏休みには、「学社融合」の取り組みを行いました。第二中学校の協力を得て、会場を中学校として、中学生の指導のもとに「60歳以上のパソコン教室」講座を実施し、これは現在も各公民館で事業として毎年継続しています。

その後も公民館運営審議会で審議を重ね、「異世代交流事業に取り組むことは、少子高齢化社会の『地域づくり』にとって大きな意味がある」と考えました。異世代交流事業が地域に根ざした事業になるために、日頃から地域で子どもたちに関わる活動をしている団体の方々に集まっていただき、「地域会議」を開始する呼びかけを公民館と公民館運営審議会の両者で行いました。

2002年3月に「第1回地域会議」を実施しました。（別紙、現在のメンバー構成）「地域会議」は、お互いの情報交換の場となり、その中から、共通の地域課題に向けての取り組みが話し合われ、協働の事業の企画実施が行われています。さらに、「地域会議」を実施したことで、メンバー（団体）相互の協働事業が生まれました。

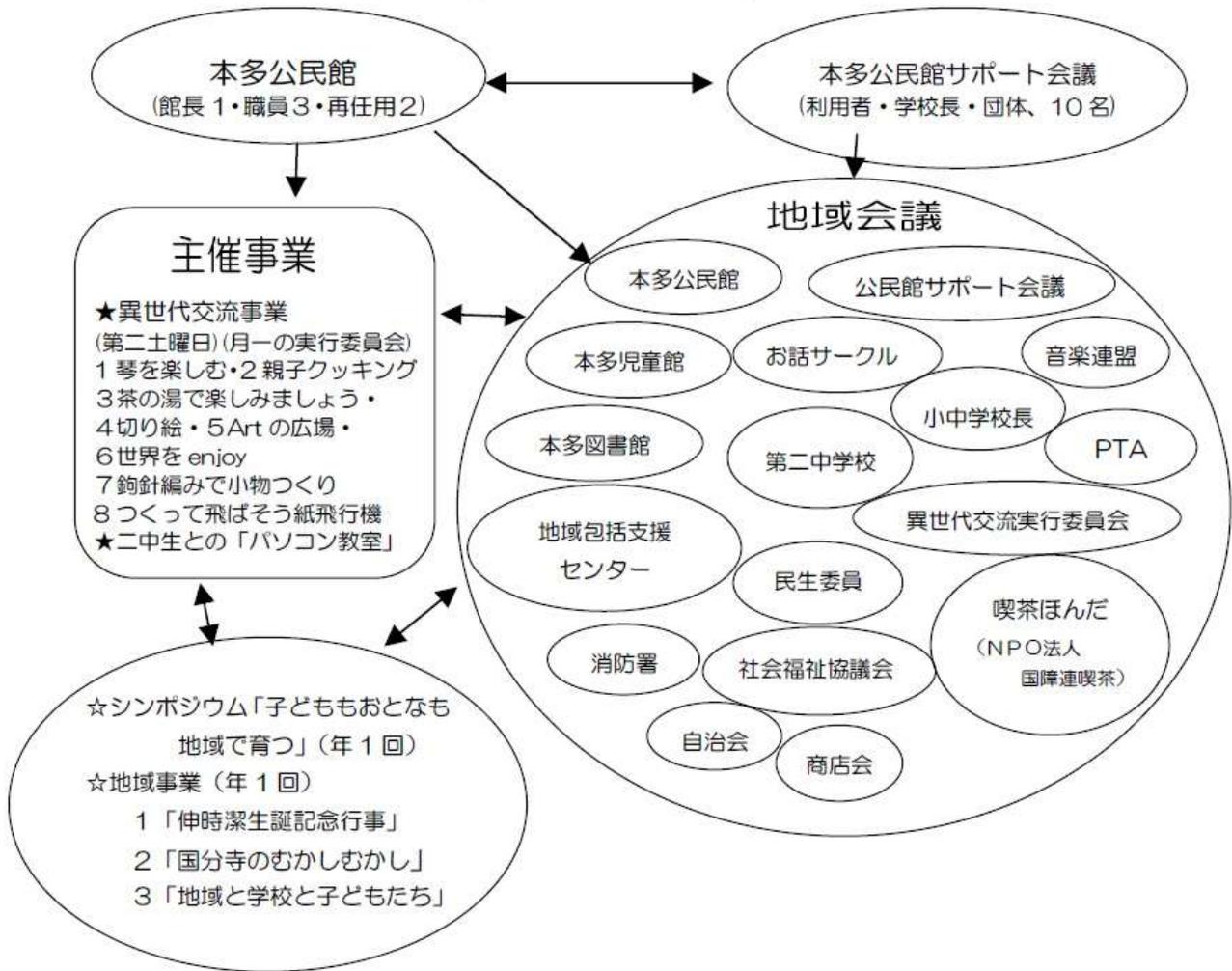
例えば、

- ・児童館の行事に老人会の方々が「昔遊び」の指導者に。
- ・PTAの行事に公民館のサークルが講師に。
- ・異世代交流事業が小学校の「総合的な学習の時間」の授業やサマースクールの講師に。
- ・民生委員から、高齢者が家から出かける場所をと、「喫茶ほんだ」が「おしゃべり茶話会」公民館サークル（語りの会、コースグループ等）の出演で実施。

などです。



【本多公民館と地域会議】



(2) 異世代交流事業の取り組み

異世代交流事業は、2002年5月、公民館報『けやきの樹』に参加事業者の募集をして準備会としてスタートしました。事業の運営者の話し合う場として、異世代交流事業実行委員会を毎月1回、第1水曜日の午前中に実施しています。

異世代交流事業は、2002年7月には、第2土曜日の午前10時～12時でスタートしました。毎月の実行委員会では、各事業の報告・事業の確認・事業の課題について・合同事業の企画・公民館まつり（新緑まつり）、児童館まつりへの参加について等を話し合い、各事業の取り組みから見えた問題や解決方法についても相談し合っています。

また、実行委員会の中では次のことを確認しています。

<ねらい>

- ◎ 地域の大人と子どもの交流、体験広場
- ◎ 地域のグループ指導者のつながりを深める

◎ 地域の人たちの交流、協力関係を生み出す

◎ 公民館と学校の連携協力を生み出す

<大切にしていること>

◎ 子どもと大人が地域で共に活動する場にしていく。

◎ 大人が一方的に教えるのではなく、互いが育つ場にしていく。

◎ お互いの楽しむ取り組みを行う

◎ 大人から子どもにメッセージを伝える取り組みにしたい。

以上のことを共通認識として、指導者と参加者は共に“学び交流する立場”で運営しています。異世代交流事業は、単に学校が休みになったことによる、子どもの受け皿や習い事のような活動ではなく、「学校・家庭・地域が連携できるような事業」にしたいという意識で取り組んでいます。

また、異世代交流事業は、本多公民館「新緑まつり」に体験交流の場として参加し、その時に子どもが学校の先生や家族を招待していることがあります。中学生が小学生の仲間の世話をしたり、何年も事業に参加していて自分から事業のスタッフになりたいと言いだしたり等、子どもたちの成長の様子や事業で育まれている力を知ることができる機会となっています。

2009年度からは事業参加者が一堂に会して、事業同士の「交流会」を実施しています。これは、事業がどのように行っているのかを事業ごとに発表し合い、交流を拡大し、参加者が事業の趣旨や目的を再確認し、事業同士が横のつながりを持てる機会となっています。

### (3) 地域会議から広がり

2011年「第60回読売教育賞」に応募し、地域社会教育活動の「優秀賞」を受賞しました。この時は、自分たちの活動の必要性の再確認ができたように考えます。

また、地域会議を通して、地域の課題の共有化や世代・立場を超えた人的ネットワークを構築しています。例えば、中学校区の地域連合町会や町内会を中心に「地域の安全・安心を考える集い」（年1回、今年度は3月4日、11回目、本多公民館ホール）、この事業は、将来を担う中学生に地域に参加してもらいたいと、生徒会、各小・中学校PTA、民生・児童委員、保護司などのメンバーが実行委員会を組織して準備しています。

公民館は、「地域の人たちの学びを支え、意識的に地域づくり」をしています。その取り組みと相互協力するように、地域会議が軸となり、地域のコーディネーターとして「地域をつくりだす」役割を果たしていると実感しています。

。

#### (4) 地域づくりを担う職員

現在の社会課題である「地域づくり」は、公民館が大きな役割を担っていると思います。そして公民館の職員は「地域のコーディネーター」としての期待は大きいと考えています。「施設の提供と整備」「グループの支援」「資料の提供」「主催事業の企画、実施」「縦割り行政を横に繋げる」「地域の人材を掘り起こす」「団体との橋渡し」・・・他

#### (5) 終わりに

公民館は、生涯の学びの館であり、色々な分野の主催事業を実施し、グループ化を促して活動の継続を支援していますが、学びと人との繋がりで、楽しくおもしろい「おもちゃ箱」のような場所だと思っています。

### 1. 2 事例報告「小平市における『公民館事業企画委員会の取り組み』について

植野 稔氏

#### (1) はじめに

- ① 小平市の人口は、平成28年12月1日現在で、約18万9千人です。
- ② 公民館は、全部で11館あります。中央公民館のほか分館が10館あり、市内全体にバランス良く点在しています。
- ③ 公民館活動は、戦後まもない昭和23年に「小平公民館」の開館から本格的に始まり、以来70年近くにわたり、地域における交流・集いの場、学びの場として多くの市民に利用され続けています。時代の流れや市民のニーズに沿った形で、様々な取り組みを行ってききましたが、「公民館のあるべき姿」は常に課題として挙がっていました。
- ④ 最近の小平市の取り組みの一例をみると、平成23年3月に策定した「小平市第2次行財政再構築プラン」では、公民館の利用形態や利用状況を分析し、学習施設としての機能の向上を図ることを目的とした「公民館のあり方の検討」に取り組みました。

また、平成26年3月には「公民館の課題と今後の方向性－公民館のあり方検討に関する報告書－」を作成し、公民館の求められる役割を「学習施設としてだけでなく、地域のコミュニティづくりの拠点として機能する施設」と位置づけ、公民館を中心に「互いに支え合う社会の実現を目的とする組織」に転換していく方向性を示しました。

## (2) 公民館事業企画委員会の設置

こうして、公民館を「地域のコミュニティづくりの拠点」とするために、地域のリーダーとの継続的なつながりと、地域住民の意向を適切に反映した公民館の運営を行うための機関として「公民館事業企画委員会」を設置することになりました。

## (3) 公民館事業企画委員会の設置にあたり以下のようなことを取り決めました。

- ① 公民館の全館（11館）に事業企画委員会を設置・・・各館が小学校区域を基準とした、ゆるやかな担当地域を設けることにして、それぞれの地域で「顔の見える関係」を築き、お互いの助け合いが日常的に行われる社会を作ることを目指します。
- ② 事業企画委員会の構成・・・委員会を構成する委員には、公民館利用者、自治会関係者、自主防災組織関係者、小・中学校の学校長・副校長、放課後子ども教室コーディネーター、青少年対策地区委員会関係者、民生委員・児童委員、地域包括支援センター職員など。また、それぞれの館がその地域で連携を深める方々などを想定しています。
- ③ モデル館の設置・・・事業企画委員会の全館設置に向け、まずモデルケースを設け、その状況を参考にするために、平成27年度に鈴木公民館、平成28年度に小川公民館に設置することにしました。
- ④ 平成29年度中に全館に設置・・・モデル館の検証から浮き彫りにされる効果や課題点などを共有しながら、各館が担当地域における連携を強化し、平成29年度中には全館で事業企画委員会を設置することを目指しています。
- ⑤ 事業企画委員会が取り組む内容については、次のとおりです。
  - ア 生活課題・地域課題に取り組む人材の育成・発掘を推進する講座の企画
  - イ サークル活動による学習成果を地域に還元するための事業の企画
  - ウ 乳幼児から高齢者まで多様な住民が関わる異世代間交流など、地域づくりにつながる活動の企画
  - エ 住民の意向や意見を聴取する機会の設定
  - オ 幅広い地域住民が気軽に集まり、地域情報が集まる総合的な地域づくりの拠点としての役割を実現するための取組み
  - カ 地域社会資源との連携を推進するための取組み
- ⑥ 事業企画委員会の設置により期待される効果と変化  
このように、公民館事業企画委員会の制度を設けることにより、市民と行

政との協働の拠点となる公民館は、次のような意味を持つ場として機能することができ、効果や変化が期待できます。

ア 市民・地域にとっては、職員との関わりを通じて、公民館の運営から講座学習・自発的学習を生かす場となります。

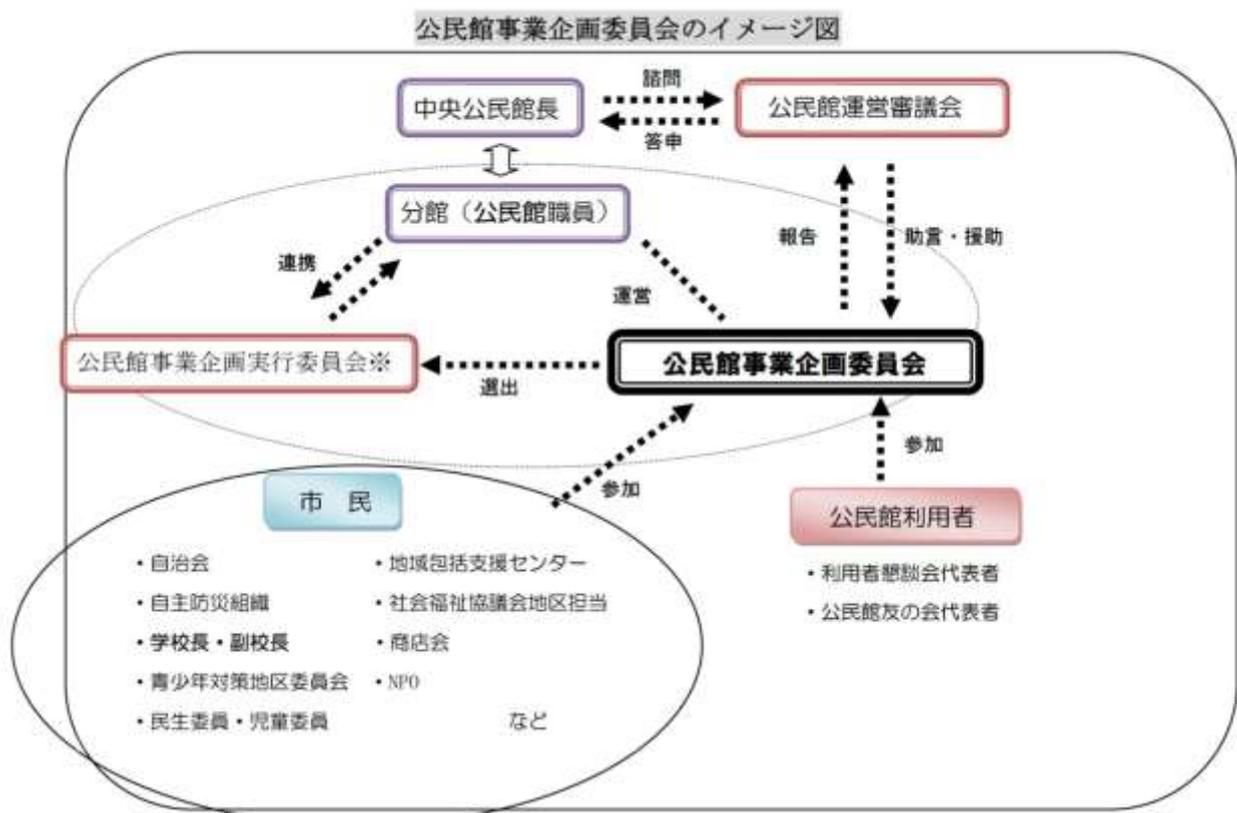
イ 職員にとっては、多様な市民との関わりの中から、様々な課題を分析することや、課題解決に向けた方策を検討、実施するといったコミュニケーション能力と政策立案能力をスキルアップする場となります。

ウ 各公民館が担当地区を持つことにより、公民館事業企画委員会と共に、地域リーダーの発掘や地域課題の解決に向けた取り組みを行うことができます。

エ 自治会、自主防災組織、民生委員、NPOなど地域リーダーとの定期的な話し合いの場を設けることで、日頃から「顔の見える関係」を作ることができます。このことにより「テーマ型の公民館」から、「地縁型の公民館」へ変化していきます。

オ 趣味や教養の講座と地域資源を生かした講座をバランスよく企画し、地域の仲間づくりを強化することができます。また、学習成果をより一層地域に還元できる取り組みを行うこともできます。

⑦ 公民館事業企画委員会のイメージ図を描くと次のとおりです。



#### (4) 鈴木公民館事業企画委員会の活動

- ① 委員会の構成・・・人数は13名（男4、女9）、任期は2年としています。  
委員の内訳は、公民館利用者代表が3名、小学校学校経営協議会会長、中学校副校長、小学校副校長、主任児童委員、自治会の防災班長、NPO法人の事務局長、地域包括支援センター所長、児童館の館長、青少対の会長、社会福祉協議会の地区担当者です。
- ② 委員会の開催・・・会議は、毎月第3木曜日の午後6時から2時間程度行っています。  
ア 27年度は、5月から3月まで毎月1回、計11回開催し、「平成28年度に実施する事業の企画」を行いました。  
イ 28年度は、4月から3月まで計10回開催（8月、11月は休会）し、「平成29年度の実施事業の企画」と「平成28年度の実施事業の検証」を行っています。
- ③ 役員会の開催・・・委員会で討議する内容を決めるための役員会を組織しています。役員会の構成は、委員長1名、副委員長2名です。
- ④ 企画した事業の内容（平成27年度に企画し、28年度実施の事業）  
委員会が27年度に企画した事業は次の3区分、10事業です。  
ア サークル活動地域還元講座・・・これはサークル活動による学習成果を地域に還元するための事業です。  
「絵手紙講座」（全12回）。「地域に出張カフェするサークルづくり」（全10回）。※「星と星座を見る会」（全4回）  
イ 異世代間地域交流講座・・・これは乳幼児から高齢者まで幅広い世代の住民が関わる異世代間交流など、地域づくりにつながる事業です。  
「季節の手仕事を身につける～梅干し、しそジュース、ブルーベリージャム、ぬか漬け～」(全4回)。「この知識が家族を守る～実生活に生かせるサバイバル術～」(全3回)。「レッツ！バランスボール～バランスボールでイキイキ生活」(全3回×2クール)。「マンスリーミニコンサート～音楽でつながろう地域の絆～」(全12回)  
ウ 地域社会資源連携講座・・・これは地域社会資源との連携を推進したり、様々な場面で活動する地域の人材を発掘、育成するための事業です。  
「アーティストフォーラム～地域のアーティストさんに学ぼう」(全10回)。「HISTORY OF BLACK MUSIC～学校では習わなかった黒人音楽の歴史と変遷を知る」(全5回)。  
※「カンパニー&ユニバーシティフォーラム～小平の企業や大学を知ろう」(全10回)

- ⑤ 企画された事業の特徴としては、次のようなことが挙げられます
- ア 内容がより多岐にわたりバラエティに富んだものになった。
  - イ 子どもから高齢者までの、幅広い世代の人が一緒に参加できる企画が多くなった。
  - ウ 地域に潜在している多くの人材を掘り起こす企画が増えた。
  - エ 日ごろ公民館に足を運ばない人たちが来館できる企画が増えた。
- ⑥ 企画・実施して見えてきたこと（数字でわかること）をいくつかあげてみます。

いずれも27年度との比較になります。

ア 実施事業数・・・27年度：9事業・44回。28年度：8事業・60回。  
事業数としては減りましたが、各事業のコマ数が増え、年間で60回になりました。

イ 依頼した講師（出演者）の数・・・27年度：8人、1グループ。28年度：25人、10グループ。28年度は、マンスリーミニコンサートやアーティストフォーラムなどに伴い、依頼した講師や出演者の数はかなり増えました。

ウ 事業の実施時期と回数・・・27年度（44回）：平日25回、土曜19回、日曜0回。

28年度（60回）：平日7回、土曜15回、日曜38回というように、日曜日の実施事業が増えています。これは、「普段、公民館を利用していない人を呼び込む」「子どもから高齢者まで多世代の人が一緒に参加できる」ということを念頭に置いた企画が多いことの表れといえます。

エ 公民館利用者の数の増加・・・4月～12月までの9ヶ月間での人数の比較になりますが、次のようになります。27年度：22,021人（男：4,958人、女：17,063人）に対し、28年度：24,887人（男：5,570人、女：19,317人）というように、28年度は全体で約2,900名、約13%の増となっています。このことは、事業企画委員会の事業がもたらした「成果」の表れといえます。

- ⑦ 課題として見えてきたこと

ア 企画する事業のジャンル区分の統一化が必要か・・・公民館が定める事業計画に沿った事業の企画を目指すためにも、ある程度のジャンルの区分設定は必要ではということもあり、平成29年度以降は、全館で共通の次の区分を設定することになりました。

その区分は「地域支援講座」「防災・安全講座」「健康講座」「子育て支援講座」「ジュニア講座」「シニア講座」「文化・教養講座」の7つで、この区

分にあてはまる事業を企画することになります。

イ 企画委員の継続性（任期と再任）・・・任期を何年にするか、また同じ人を何年再任してもらうかということは、現在直面している課題です。

ウ 企画委員の人材発掘・・・委員会の継続性を考えた場合、新たな人材を招くことも重要な課題です。そのために地域におけるコミュニケーションを強化していくことは、まさに職員の力量が問われる肝心なところでもあります。

エ 職員の時間外勤務時間の増加（勤務体制の整備と勤務体制に合わせた事業の日程調整）・・・日曜日に実施する事業が多くなったことにより、必然的に職員の時間外勤務が増える結果になりました。これに対しては、職員の勤務体制や、予算確保など根本的な対応が求められる反面、現在の勤務体制や予算規模の中での事業企画という側面も意識しなければならないことです。

#### ⑧ 企画委員の感想から

ア 各委員が異業種、異分野の集まりであり、そのような方々と一緒に取り組めたことはとても有意義だった。

イ 地域の我々の意思が事業に表れるのはとてもやりがいがあり、画期的な取り組みだったと思う。

ウ 各委員のアイデアや意識の素晴らしさを痛感できる場であった。

エ それぞれの人脈が生かした企画が生まれたと思う。

オ この場で得られた人脈を自分のところに持ち帰って生かしたい。

このように、とても前向きな声を多く聞くことができました。

現在は、27年度28年度の2年の任期を終えるにあたり、その振り返りを委員会で行い、委員一人一人の思いを集約し、それを皆で共有し次に生かしていきます。

そして平成29年度中には、中央公民館を含む全館で事業企画委員会を設置すべく、現在各館で精力的に取り組んでいます。

### 1. 3 事例報告「『なかまちテラスLINKS』の取り組みについて」

上田 滋氏

(1) 小平市について・・・当市は、昭和37年市制施行、東京都小平市となりました。図書館が誕生したのは昭和50年5月でした。現在、中央館1館、仲町図書館を含めた地区館7館、分室3館が整備されています。また、公民館の歴史は古く、昭和23年9月に小平公民館条例を設置し、中央公民館が現

在の場所に移転してからは、仲町公民館として教養・生活・健康など様々なグループ活動を中心とした学びと交流の場として発展してきました。

- (2) なかまちテラスとは・・・新しい仲町図書館は、仲町公民館との複合施設として「なかまちテラス」の愛称で平成27年3月14日からリニューアルオープンしました。

現在図書館職員11人、公民館職員5人で、直営で運営しています。愛称募集は、平成25年度事業として実施され、全国から778作品の応募の中から決定しました。新しい複合施設として様々な点で期待されます。

- (3) 人と情報の出会いの場・・・公民館は、講座・講演会やサークル活動を通して「人」と「人」とのつながり、新たな出会いを創出する場です。また、図書館は図書資料や視聴覚資料の提供で「情報」と出会える場です。新しい仲町公民館・図書館は、「人と情報の出会いの場」を基本コンセプトに、双方の資源を有効に活かし、相乗効果と新しい機能を加味することで、複合施設として市民の交流の場の設置や地域の集会機能を持たせるなど、より多様な市民が集い、多機能感やゆったり感のある施設づくりを目指します。

- (4) 妹島和世建築設計事務所・・・妹島和世さんは、昭和56年に伊東豊雄建築設計事務所に入り、62年に妹島和世建築設計事務所を設立しました。平成22年には建築界のノーベル賞といえる「プリツカー賞」を受賞されました。妹島さんは大学時代に小平から大学に通っており、小平市への思いはとても大きいと伺っております。昨年秋に、なかまちテラスは「アジアデザイン賞：銀賞」を受賞しました。また、妹島さんは秋の叙勲で紫綬褒章を受章されました。

- (5) なかまちテラスLINKSプロジェクトとは・・・「みんなで作るみんなのなかまちテラス」をコンセプトとして協働事業を展開しました。このプロジェクトには、仲町公民館、中央公民館、仲町図書館の職員が、地域の方たちと関わりながら進めていきました。LINKSとは「絆やつながり」という意味がありますが、L=L i b r a r y (図書館)、i=私、N=N a k a m a c h i (仲町)、K=K o m i n k a n (公民館)、S=S c h o o l (学校)の頭文字をあわせています。それぞれの関わりを持っている人が一同に介して、これからの「なかまちテラス」についてワークショップを開催しました。

目的としては「施設への愛着」「事業への市民参加・協働」「施設利用の枠組みづくり」「新たな担い手の掘り起し」としました。

(6) なかまちテラスLINKSプロジェクト 6つの取り組み

- ① キックオフ!なかまちテラスの未来づくりワークショップ・開館に向けて、事業のアイデア出しと、開館後にも引き続き行える活動やアイデアを地域の皆さんと出し合い、外見は立派な建物ができても、施設の中身(ソフト面)の充実を図らなければという意気込みで、ワークショップを開催しました。全7テーマで分科会を開催し、  
ア. 公民館の力で「こんなことしたい!」。イ. 図書館を活かして「こんなことができるかも!」。ウ. 「学校と地域の関係」を作るうえで、なかまちテラスに期待すること。  
エ. 「私たちも活用したい!」若者や子育て世代の方々にとってのなかまちテラス。  
オ. 「産業×なかまちテラス」でできること。カ. 地縁コミュニティや地域住民にとって、なかまちテラスは「どんな場」になったらいい?。キ. 未成年の「新しい発想」でなかまちテラスをよくしよう。) の各テーマでの話し合いが行われ、それを4回の全体会でまとめました。延べ135人の市民の参加を得て、膨大な、かつ質の高いアイデアが出され、「それを実現しなくては!!」ということで「なかまちテラス未来づくり実行委員会」を立ち上げました。
- ② この指とまれ!なかまちテラスでやりたいこと大募集・なかまちテラスで活動するサークルを募集しました。募集する分野は「公民館・図書館と連携した取り組み」「学校と連携した取り組み」「なかまちテラスをPRする取り組み」などです。その分野に基づいた活動案を市民の方々に提案をしてもらい、4つの団体が立ち上がりました。それらの団体には活動が軌道に乗るまで支援を行います。今後、サークル間の連携や地域との関わりを大切に、学びの輪を広げていくような社会教育活動を展開することを期待しています。
- ③ 武蔵野美術大学との連携事業『なかまちテラスのPRとコミュニティ・デザイン』・同大学視覚伝達デザイン学科の「環境デザイン」の授業と協働した取り組みで、PR活動を通じて地域交流を生み出すようなプロジェクト学習を行いました。学生たちは授業以外に多くの時間と労力を使い、多くの地域住民へのリサーチや他の事業にも積極的に参加しました。その結果「仲

町やなかまちテラスについて知る・学ぶ」「コミュニティーデザインとして  
既存利用者と新規利用者とのつながりづくり」をテーマとした活動が始まりました。私たち職員も実際の授業の場に出向き一緒に話し合いを行うなどした結果、このプロジェクトの目的は「コミュニティデザインなかまちテラスのPR」に決まりました。具体的な活動内容は「PRキャラクターづくり」「小平駅南口の看板のデザイン」「にじバス（コミュニティバス）のラッピングデザイン」「なかまちテラスのロゴづくり」です。9月から12月の4ヶ月間で9人の学生がこの活動を行いました。

私たち職員もできるだけ学生のサポートをし、方向性がずれないように協力をしました。その結果「今までの仲町公民館や図書館は若者や子育て世代の利用が少ない」「市民が仲町のことをあまりよく知らない」という課題が浮き彫りになりました。

ア.「あっちこっちナカマッチ」・・・コミュニティデザインとなかまちテラスのPRを重ね合わせ、見えてきたものに「イベントの開催」がありました。そして「あっちこっちナカマッチ」という「なかまちテラス公式PRキャラクターづくりを市民とともにつくろう！！」の企画がスタートしました。「あっちこっちナカマッチ」は自分のアバター（分身）づくりです。仲町にゆかりのあるものをパーツとして組み合わせ、目鼻口と手足を付けると出来上がりです。ワークショップ当日の参加者は延べ100人を超え、出来上がった「あっちこっちナカマッチ」は156体、どれとして同じものではなく、見ているだけでもとても楽しいものです。予想以上の市民の参加で、朝9時から午後6時過ぎまでイベントを実施しました。終了後の学生さんたちの顔は、達成感とこれからの課題へのやる気に満ち溢れていました。

イ.「にじバスのラッピング」・・・検討を重ね、バックの色は「水色」決まりました。数十体のあっちこっちナカマッチを乗せた市内循環バスが市内を走りました。バス利用者からの反応も上々でした。小平駅南口にはPR看板も作られました。また「あっちこっちナカマッチ図鑑」も作り、図書館に寄贈していただきました。

ウ.「なかまちテラスの『ロゴマーク』」・・・なかまちテラスの建物を図案化し擬人化したもので、お互いが寄り添う様なデザインでエキスパンドメタルも描かれています。ロゴマークを作成するにあたりその要素を考え、「地域性を大切にすること」「なかまちテラスのオリジナリティを出す」「人と人とのつながりを意識する」この3つの要素を念頭に作成にあたりました。

- ④ 津田塾大学フェアトレード推進サークルとの連携事業「なかまちテラス版まちチョコ」・津田塾大学・武蔵野美術大学・仲町共栄会・なかまちテラスが協働して、「まちチョコ」というフェアトレードチョコのなかまちテラス版を作りました。ラッピングされた「まちチョコ」には、あっちこっちナカマツチのキャラクターが使われており、市内の商店でも販売していただきました。
- ⑤ なかまちテラス未来づくり実行委員会・第1弾の事業で出されたアイデアを実行するために立ち上げました。22回の打ち合わせを行い、「開館100日前イベント」「旧仲町公民館の閉館イベント」「なかまちテラスだよりの刊行」「なかまちテラス開館イベント」などの企画・運営をしました。今後の事業についても多くの企画案があがっています。また、カフェについてもその運営やメニューなどを運営者である「あさやけ第2作業所」の皆さんと考えました。
- ⑥ なかまちテラスまつり実行委員会・30年続いてきた「仲町公民館まつり」を「なかまちテラスまつり」に改め、平成27年5月16日・17日の土日に開催しました。二日間で4181人という多くの地域の皆さんが来館されました。各サークルは、自分たちの作品を厳選し展示に協力してくれました。学校の児童・生徒作品の出展では、学校支援コーディネーターの皆さんの協力で多くの作品を展示することができました。また、屋外では嘉悦大学の学生さんが手がけた「こだプリン」（ブルーベリー味）の販売などもあり、館内外とも大盛況でした。

#### (7) なかまちテラスは今

【全館】なかまちテラスはリニューアルオープン当日からW i f i 対応しています。また、公民館の講座等の事業が無い日（日曜日・月曜日）は、講座室を読書室として開放しています。職員は図書館業務と公民館業務を共通の業務とし、カウンターでは両方の業務を担当しています。これまで独立していた行事等について、複合施設である利点を活かし、図書館・公民館の相互乗り入れ事業を展開しています。「なかまちテラスまつり」は、なかまちテラスL i N K Sを中心に協働して実施しています。

【公民館】公民館は開館日を拡大し、毎月第3木曜日と年末年始以外は開館しています。

【図書館】図書館は午前9時開館、火曜、水曜は午後8時まで利用できます。また、市内で初めて貸し出しロッカーを設置しました。リクエスト本を開館時間内に借りに来られない人を対象にしています。また、全ての本にI Cタ

グを付け自動貸出機を使い、自分で貸出しできるようになりました。4か所のパソコン電源席の設置は利用者に好評です。

また、蔵書点検機器を導入により他館に比べ臨時休館日が減りました。

#### (8) なかまちテラス L i N K S

なかまちテラス L i N K S は、昨年のなかまちテラス未来作り実行委員会のメンバーが中心となり、「なかまちテラスを核とした地域の協働の場」という位置付けで活動しています。「夏休みスペシャル体験講座」「イルミネーション点灯」「自治会交流会」「なかまちテラス開館1周年事業」等を企画立案しました。当日の運営も L i N K S メンバーが中心となって実施しました。パンフレットも完成し市内各図書館で販売しています。

また、簡易版も作成し無料で配布しています。施設の写真や平面図とともに設計者の妹島和世さんがどのような想いでこの建物を設計したかが分かる内容となっています。

#### (9) まとめ

なかまちテラスは「生涯学習の振興」と「地域の活性化」を目指す施設として、市民、地域、行政など多くの主体が関わりながら様々な事業を展開していく、新しいタイプの複合施設で、多くの市民が学び、集う場となっています。「生涯学習の振興」については、生涯学習の拠点として公民館と図書館が連携することによる相乗効果を発揮し、人と情報が出合い、交流と学びを深め、その成果を地域に還元する学習活動の展開を図っていきます。「地域の活性化」については、著名な建築家によるデザインということから、市内外から多くの人を訪れることが予想されるため、市の観光資源として、まちの活性化に役立つ施設となります。

夜の「なかまちテラス」の外観からは、書架や机いす、人の流れが照らし出され、昼間と違いとても素敵な場所に変身します。私達職員は、図書館職員であり公民館職員でもあるという2足のわらじを履いています。図書館職員であるという既成概念を脱ぎ捨て、なかまちテラスの職員であるということに誇りを持ち市民サービスを行っています。この協力体制こそ、私たちの進むべき道と考えます。施設のハード面だけでなく、ソフト面も負けないよう取り組んでいきます。

## 2 基調講演 「公民館から始める地域づくり」

講師：田中 雅文氏（日本女子大学人間社会学部教授）

今日はテーマが「地域づくり」です。「公民館から始める地域づくり」ということですが、現在、公民館は単に学びの場というだけではなく、いかに地域に役



立つことができるか、地域づくり、コミュニティづくり、まちづくりに対していかに貢献できるのか、各自治体で厳しく評価されています。私は国分寺市と小平市で公民館運営審議会委員をしていますが、国分寺市は答申の作成でいよいよ大詰めにかかるところで、テーマは「地域づくり」です。いかに今まで国分寺市の公民館

が、地域づくりに対して貢献してきたか、さらに発展していくにはどうしたらいいのか、という流れで答申が出来上がってきています。

また、小平市においては、来年度の公民館事業計画の案にはこうあります。目標の3本柱の1本目「個人の教養を高めるとともに、コミュニティづくりを進める公民館の機能を重視する。」コミュニティづくりです。2本目「一般的な知識・教養を地域あるいは個々の生活の課題と関連づけ、実践に結び付けていく。」これは、学ぶだけではなく地域で活動しようということです。3本目「地域の人材養成、ネットワークづくり、コミュニティづくりの基盤を整備する。」これも地域の人材を作ろうということで、いずれも地域にいかに貢献できるかということで公民館事業が計画されています。今や地域づくりと公民館は、切っても切れない関係になりつつあります。そして、地域づくり、まちづくり、コミュニティづくりにいかに貢献できるかということが地域における公民館の評価に繋がってきます。今日は非常に重要な分科会であると思っています。

私は、今は大学の教員ですが、若い頃は民間のシンクタンクに勤めていました。シンクタンクでは、地域の課題を分析し報告書を作成して提案する仕事をしてきました。特に、地方で地域づくりのお手伝いをしてきましたが、たまたま、教育にも興味があったため、当時の国土庁が推進した「大学の地方分散」という、いろいろな地域の大学誘致プロジェクトの青写真づくりを手伝って来ました。これは、大学を誘致することによって、いかに地域を活性化するかというプロジェクトです。そのほか、地場産業の活性化、長期計画、総合計画の基礎的なアイデア集づくりをしてきました。地域がいかに活性化するかという仕事をしてきました。今から30年位前のことですが、その頃すでに、コミュニティづくりというものが出ていましたが、私が仕事でやっていたことの大部分はハードの基盤整

備が中心のものでした。大学も、内容はソフトですが、建物はハードで建築業界も活性化するというものでした。

今、地域づくりはハードというよりはソフトの部分です。「人と人とが繋がる」とか「子ども達の育成をどうするか」「高齢者の方々や障がい者の方々が地域で充実した生活をするにはどうしたらいいか」という、特に人間に絡む問題であり、人間に絡んだソフトの分野、これが今の地域づくりのかなり重要なテーマです。ということは、公民館の事業がかなりそれに直結して地域に貢献できることになってきた、つまり「地域づくりの焦点がかなりソフトに移ってきた」ということは、同時に「今の公民館が地域づくりにかなり貢献できる部分が広がってきた」ということです。

(1) はじめに、クイズです。・ ・ 1 問目。「公民館はいつできたか？戦後、憲法と公民館がどちらが先にできたか？」正解は「公民館が先」です。昭和21年7月5日、文部次官通牒「公民館の設置基準に設置・運営について」が出て、日本国憲法より早かったということになります。

2 問目。「公民館の数は中学校より多いか？」正解は「中学校より多い」。ちなみに、区切りが良くて、中学校が約1万、公民館が約1万5千、小学校が約2万、高等学校は約5千ということです。

3 問目。「世界の各地に公民館があるか？」正解は「ないとも言えるし、あるとも言える」。公民館という外国語はありません。公民館に相当する施設はアジアの国々にユネスコの主導により「コミュニティラーニングセンター」という名称のもとに置かれています。

(2) 公民館の発祥～郷土をおこす～・ ・ まず、公民館の発祥のことについてです。戦後間もなくできた公民館ですが、先ほど、今の公民館はかなり地域づくりに焦点を当てた施設だと説明しましたが、今新しく出てきた話ではなく、もともと公民館は地域づくりのための施設だったのです。「公民館生みの親」と言われ、当時文部省で公民館づくりを推進した寺中作雄という人が、「公民館の建設」という本を書きました。

その中で彼は、「公民の家」という言葉を使っています。人々のプライベートな家は、家族がいる家があります。人々はもう一つの人格を持っていて、それが公民であるということです。公民とは、「自己と社会の関係についての正しい自覚を持ち」「公共社会の完成のために尽くす、あるいは尽くそうとする人」ということ、要するに「社会のために何をしたら良いか考えられるような人」ということです。そういう人を公民と呼び、その人々が集い一緒に何か考えたり、地域

を良くしようとする拠点、それが公民の家、公民館だということです。当時これを推奨するために「公民館の歌」が作られ、公民館のつどいで時々歌われています。キーワードは「郷土を興すよろこび」「郷土をみんなで興しましょう」、その学びの拠点が公民館だということです。その後、高度経済成長でカルチャーセンターができ、大学公開講座ができ、学ぶことそのものを喜びとするような風潮ができ、公民館も個人個人が楽しく教養を高める場として機能するというような流れも出てきました。同時に行政の縦割りの中で、地域づくりは一般行政の問題であり、公民館は教育の分野であることから、公民館はなんとなく、地域づくりと縁が切れそうな環境の下で進んできました。

もともと、戦後の日本の行政は未分化の状態でもあり、今であれば農水省管轄や国交省管轄のところ、以前は地域で学びながら、公民館がみんなやっていました。例えば、農業青年が新しい作物の開発をしたということで、優良公民館として表彰されたということもありました。経済成長と縦割り行政の中で、公民館がかなり狭い意味での社会教育の分野に特定されてきて、公民館は学びの場ということが中心となり、どうしても地域の役に立っていないという見方がされるようになってきました。そこで今改めて、現代風に「地域づくりの拠点」として「公民館がどのように役立つべきなのか」が言われ始めた、という流れがあると思っています。

(3) 公民館運営上の目的・・・公民館運営上の目的として、寺中作雄監修の公民館図説には7つあります。「民主的社会教育」「社交」「産業振興」「民主主義」「文化交流」「青年」「郷土振興」です。今では、産業振興、郷土振興は公民館事業としてはほとんど実施されていませんが、文化交流や社交とも書かれていて、これは今風の言葉ではコミュニティという意味です。ですから、かなり公民館の目的の多くは「コミュニティづくり」「地域づくり」「まちづくり」に関係するものであった。ということが良くわかります。

社会教育法で規定された公民館の目的には「生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的とする」と書かれていますが、「地域の文化を振興しよう」ということです。また、社会福祉というのは狭い意味での社会福祉ではなく、広い意味での社会福祉ということを見ると、地域の人々の暮らしを良くするということです。今風にいえば「地域づくりの拠点として機能する」ということが、すでに法律でうたわれているのです。

もともと公民館は、地域づくりの学びの拠点だったと書いていいわけです。それがいろいろな経緯の中で、学ぶことだけが公民館、公民館は学びの場を提供するだけと書いてきてしまいました。だけど、もともとの発祥の経緯や趣旨、法律

の趣旨によれば、公民館は当然地域づくりに寄与するものであり、どうやって寄与するかというと、学びを通じて寄与するということです。

公民館関係者は自信を持ってこう考えていいと思います。では、現在の地域に対して、公民館がどう役割を果たすのか、ということですが、ここでビデオを見ていただきます。

10年以上前のものですが、公民館の今後のあり方についてがテーマとなっています。国分寺市が事務局だったため、国分寺市の事例が多いですが、今もやっぱり大事だなと思うことがあります。さらに、10数年間でもっと発展しているものもあります。例えば、小平市の事業企画委員会であるとか、なかまちテラスの図書館との連携や複合化など、新しい取組もあります。

～ 第45回関ブロの公民館研究大会DVD、約8分上映 ～

1つ目の事例は、国分寺市光公民館の行政と市民の協働で、テーマは自然環境の保全、そのために、学びのための拠点として公民館が役に立ったというものです。2つ目の事例は、国立市の公民館だよりを市民参画で作っていくというものです。3つ目は異世代間の交流事業、4つ目は保育室、5つ目は障がい者青年学級です。後半の3つは異世代間の交流、保育室を通した母親同士の繋がりや他の家庭のお子さんとの繋がり、青年学級は健常者と障がい者の繋がり、コミュニティ形成の基盤を作るという意味での地域づくりの一側面です。

1つ目はまさに協働で自然保護活動を行っていく、「地域づくり」そのものです。2つ目の市民参画については、市民が行政に対して意見を言うことや、行政と一緒に何か考える時に一つの姿勢が身に付くということで、つまりは、地域づくりにも関係してくるものではないかと思います。公民館の特性を生かした地域づくりへの貢献を考えたときに、10年以上前から実施されていた良い事例だということがわかります。

余談ですが、国分寺市の保育室40周年のイベントで、ある母親から話を聞きました。「日頃、子どもと1対1で接していたが、保育室に子どもを預けて他の母親と一緒に学習することで、とても視野が広がった」。また、「子供が小学校に進学した際に、PTAの行事でより幅広い視野から活動を行うことができた」。この話から、この母親は、子どもと共に地域を見ていて、子どもにとってどういう街づくりの課題があるのかが見えてきたのだと思います。そして、やがてその母親は、子どもが小学校、中学校と進み、地域の活動にだんだん入っていくことになり、幅広い視野を持った母親が地域づくりに取り組むことになります。

このように公民館では、保育室を通して、地域で活動する人材を育て、地域づくりを担う人材育成を行っていて、その出発点が保育室ではないかということを実際に経験者の話を聞いて感じました。公民館では、保育室の予算が削られるこ

ともありますが、将来の地域づくりを担う人材育成のための投資だと思えばいいのではないか。そう考えると保育室は、ものすごい効果があるもので、公民館だからこそできるものだと思います。

#### (4) 地域づくりにおける公民館の役割

① 新しい「つながり」を広げる・・・「地域づくり」とは、何も大それたことを考えなくても、まず人と人がつながること、これが地域づくりの基本だと思います。市民が一人で何かをできる訳ではないし、五人の人がバラバラでも効果が上がりません。だからみんなでつながり合って、街を良くしていくことを考えると、まず基本はつながりだということです。

先ほどのDVDでも、異世代間のつながり、障がい者と健常者のつながり、異文化間のつながり、いろいろなつながりがあります。そのようなつながりを公民館での学びを通して生んでいくということが、今どきの分断されている社会の中ではとても大事なことだということです。ですから、つながりを作っているという観点から公民館を再評価することが大事だと思います。

② 地域課題の解決に資する・・・事例の光公民館は、自然環境を保全していくことを行政と一緒に実施していましたが、公民館は、地域の課題に応じて学習の場を設け、市民が学びあって活動につなげることができます。一人ひとりがバラバラに学んでも効果は上がりません。人と人とのつながりを通して、課題の解決も効果的になり、課題を解決するにはみんなで協力しなければならないので、当然つながりが生まれます。

このように①と②は循環しながら発達していきます。学びながらみんなで協力して地域を良くしていく、それがまた、繋がりを強めていくということです。このような関係をイメージしながら、公民館の講座やグループ学習を実践していくと良いのではないかと思います。環境のグループと子育てのグループが一緒に取り組むと、先ほどの光公民館の事例のように、地域の雑木林で子どもたちにいろいろなことを学んでもらうことができることになります。ですから、学習グループもそれぞれが独自に活動するのではなく、つながり合ってコラボで活動していくことが非常に大事になってきます。コラボのきっかけになるのは、一つは公民館まつりです。まつりの実行委員会の中でみんなが協力し、知らない団体同士が知り合うきっかけになり、つながりと地域課題の解決という循環性ができるということがとても大切です。

③ 子ども・若者の成長を支える・・・今、公民館では子どもと若者が大事だと言われています。文部科学省の方がいろいろな地域で講演をする時も子どもを強調します。各自治体では、社会教育のこれからの課題として地域教育力を高める

ことが求められています。地域教育力とは、学校だけが教育の場ではなく、子どもを地域で育てるということです。そのために社会教育が頑張って地域の教育力を高めていくということです。

長谷部さんの発表にもありましたが、異世代間交流や地域会議などが一つの事例となりますが、そのための拠点は公民館です。子どもや若者に焦点を当てて、実施していくことも大事なポイントになるかと思います。

(5) つながりと個性尊重・・・つながりと個性尊重という簡単な図ですが、昔は伝統的共同体が日本の各地にあり、人と人がつながり合って相互扶助で生きてきました。しかし、個性が尊重されていない、出る杭は打たれるなど、今と比べると個人個人の主体性や好みが重視されていませんでした。今と比べ相対的にみると、つながりが重視され、個性はあまり重視しない、ということが伝統的共同体の特徴です。経済成長と都市化に伴い、現代の消費社会に発展してくると、個性が重視されきます。個人個人の好みによって、お金さえあればいろいろな自分の生活がデザインできます。その代わりに、つながりは切れます。

3. 1 1以降、「きずな」や「つながり」が強調されていますが、あれ以前に我々の社会では、どんどんつながりは切れ始めていました。震災前に、NHKでは、「無縁社会」という言葉を使い、社会問題として取り上げました。つながりが切れて、個性が尊重されているというのが現代消費社会の特徴です。しかし、現代消費社会では、セーフティネットが無くなった、自分で何でも選択しないといけないから大変だ、など大学の学生を見ていると就職活動はなかなか大変です。自分が何に向いているか選択し、自分で企業を選択し、将来の進路を選択しなくてはならない、という常に選択のプレッシャーがある訳です。公民館の活動は義務ではなく、伝統的共同体とは違います。

市民の方は公民館を選択して来ています。嫌ならまた抜ければよいというもので、選択する中で、サークルとか公民館の活動で昔のつながりと比べると開放的で自由で、出入り自由なつながりを得ることができるのです。つながりと個性尊重とが両立した世界、こういうのが、今人々に求められています。例えばNPOの活動とか、ボランティア団体の活動は、こういう面を持っていて、自分は環境に関心があるから活動に参加すると、そこでつながりが生まれる。でも他の関心が生まれれば、いつでも抜けられる。これが、ボランティアの世界の良い部分でもあって、なかなか継続性が無いという面もありますが、そういう開放的なつながりが、今とても求められていて、それを公民館が提供していると言っていると思います。

(6) 学校支援地域本部 ⇒ 地域学校協働本部・・・文部科学省は前までは、学校支援地域本部を推奨してきました。三多摩では特に小平市などが力を入れて、学校支援ボランティアを育成してきました。1年前には中教審の答申が出て、地域は学校に対して単に支援するだけではなく、地域と学校が協働する地域学校協働本部を推奨し始めました。

地域が学校に対して一方的に支援するのではなく、地域と学校が一緒になって子どもの教育に力を出していく学び合いということで推奨しています。学校支援ボランティアが子どもにいろいろ教えますが、子どもが大人に教わって良かったというだけではなく、子どもに教えることで大人が学ぶ、つまり学校支援ボランティアの活動は学び合いということです。このことから、単に支援するのではなく、一緒になって地域を良くし、子どもを育て大人も育つという、協働の関係が大事だと言われています。

このようにしていくと、地域と学校との新たなコラボレーションも生まれてきます。公民館が子どもに焦点を当てるときに、学校とのコラボが重要になってきて、それが、大人の学びにも繋がります。私も武蔵野市で雑木林の保全活動をやっていますが、子どもたちが木に名札を付けるという作業を手伝ってきましたが、講師役の大人が子どもにいろいろ教えていましたが、この人の幸せそうな顔、普段見なかったような嬉しそうな顔をしていました。子どもに何かしてあげるといふことは、大人もそこからいろいろなものを貰うということです。子どもに教えている大人の方が、自分の人生に希望を持てるような気持ちにさせてくれる子どもは、天性の教育力を大人に対して持っている素晴らしいことです。公民館が学校と地域をつなぐことができると良いし、事例も多く出てきています。

(7) 他機関・団体とのネットワーク・・・公民館が人と人との関係を作るだけならば、いろいろな人来てもらっただけですが、実際に地域の自然保護活動を活性化させよう、福祉活動を地域で展開してもらいたいと考える場合、それぞれに活動しているNPO団体やボランティア団体と公民館があらかじめ関係を持っていることで効果的に実行できます。地域の課題で環境、福祉、青少年といろいろありますが、それぞれの行政の関連部門と関係を持っていることで当然効果的に実行できます。

公民館が地域づくりを考えるなら、関連する行政部門はもちろん、他機関や団体とネットワークを組んでいくとより効果的に実践に結びつきます。小平市のなかまちテラスは、公民館と図書館が複合して、連携した事業が進められている良い例です。

(8) 市民参画による公民館の運営・先ほどの事例であった国立市の公民館だよりや、小平市の事業企画委員会が市民参画ということになります。市民参画で講座の企画をすることで、市民が地域に帰って団体同士がコラボしていくと良いし、市民の協働感覚が身について、地域づくりに貢献できる可能性を持っています。

(9) 職員の教育訓練の場として・なかまちテラスや鈴木公民館の事業企画委員会では、まさに、市民の中に入って行くことで、職員の研修の場となっています。長野県飯田市では、公民館を職員の研修の場としていて、公民館で直接市民と話して地域を知り、その職員がまた一般行政部門部局へ戻った時に、地域感覚を備えた地域活性化に貢献する職員の育成の場としているとされています。公民館を職員が地域を知る研修の場として利用することで、地域の活性化に役立つ職員を育成させるという考え方になると思います。

### 3 パネルディスカッション

田中 雅文氏、長谷部 豊子氏、上田 滋氏、植野 稔氏

田中：公民館の中で、いろいろな人が来て地域づくりにつながった事例を報告していただきましたが、地域に出て地域で何をするのが重要であって、地域への波及効果があれば、ぜひ教えていただきたいと思います。

長谷部：地域会議の場で人がつながりいろいろな方とのネットワークができました。学校で市民を呼んで何か会議をする時に「公民館の人が紹介するので、学校に安心して市民の方を呼べる」と校長先生から言っていたいたり、町会が学校と何かする時も頼みやすいと言われたことがありました。これは、公民館で地域会議を実施したことから地域に広がったことで、公民館が間に入ってつなげたのではないかと思います。

植野：事業企画委員会に参加している方々が、それぞれに大きなネットワークを持っています。そういう方々が集まって一緒に事業の企画に取り組んでいく中で、そのネットワークが更に絡み合うようなものができあがっていると思います。異業種、他団体との話し合いの中で、自分たちの団体活動の参考になったとの委員さんからの感想でもあるように、事業企画委員会の立ち上げが活かされていると思います。



上田：なかまちテラスLiNKsは年に数回全体会を行っています。全体会の前にいろいろな方がご意見を持ち込んできます。イルミネーションについては、ある大学の学生が持ち込んで、全体会にかけた上で実施することになりました。これには市内の他の大学の学生も一緒に実施しました。

また、自治会交流会では防災というテーマで実施したところ、自治会同士の交流が生まれました。なかまちテラスは場所の提供というだけで、いろいろな方が集まりネットワークが広がっていくと感じました。

田中：公民館に地域の中心的な方が集まることによって、地域のネットワークが広がるという効果があります。また、公民館でいろいろなテーマを考えることによって、テーマに即した地域づくりが活発になります。それぞれのお話を聞いて、3人の方が関係した地域づくりの取組の中で、地域に波及効果があることが確認できました。

三多摩で、特に環境問題や何か難しい問題が公民館に持ち込まれているのかよくわかりませんが、社会教育の世界でとても歴史的な事実としてよく語られることがあります。静岡県三島市や沼津市周辺で、東京オリンピックの頃、石油コンビナートが進出してくるという問題が起きました。そこで、住民が「コンビナートが来て大丈夫か」ということで、自分たちで勉強を始めました。

市民が自分たちで勉強したり、調べたりして学んだ成果を公民館でみんなで共有し合いました。また、みんなで公害問題を勉強していました。その成果を踏まえて、市民たちが市長に「コンビナートは要らない」と宣言しました。市長はそれを受け止め、県に対して「当市はコンビナートは要らない」と答え、コンビナートの進出を阻止しました。これは、論文などで取り上げられるような有名な出来事です。これも地域づくりの拠点としての公民館にあります。

田中：新しい層がどのくらい加わってきているか、それぞれの事例を通して、これまで公民館に来なかった人がこれをやることで新しく加わってくれたというのが、どのくらい、どのようにあるのかを、そこに絞ってもう一度お話をください。

長谷部：これからの公民館の課題だと思います。どういう人たちに公民館に来てもらえるかということ、「若者」に来てほしいがすぐには出てきません。

日頃、民生委員として集まっていますが、先日、少子高齢化をどのように公民館が担うかという課題で、地域包括センターの部署の方が一緒に来て公民館で懇談会をしました。「公民館は高齢者にとって大切な場所だ」と再度言われ、高齢でも公民館ではいろいろな活動をしていると再認識しま

した。また、その活動を段々と世代でつないでもらえれば良いなと思います。また、もう1点はなかなか若者にすぐ直結することありませんが、「PTA」の方たちは年々変わっていくので、今の子どもとの関係が見えてくると思っています。

田中：少しずつ各層が入ってきているということですか。

植野：事業企画委員会では、企画をする前提として、新しい方々、普段公民館に来られない方々を呼び込もうという狙いがあるが、実際に土曜・日曜、特に日曜日に実施する事業が増えました。それに伴って、普段平日に来られない人の層は明らかに来館者として数字に表れていると思います。象徴的なのは「マンスリーミニコンサート」という新しい企画を実施しましたが、毎月第1日曜日の午前中、利用者や地域の方など、音楽を中心としたアーティストを呼んで小さなコンサートを実施しています。その時に「初めて来た方は？」と聞くとかなりの方が手を挙げます。単発の企画ですが「公民館ではこんなことをやっている」ということを、いろいろな方に知ってもらう機会になっていると思います。また、リピーターとして、公民館に関心を示していただけるきっかけになっていると思います。

田中：職員が作っていた講座では来られなかった方々が、市民の企画委員の方々によるアイデアで新しい層にターゲットを当てて事業を展開することで、実際に新しい人が入ってきているということですか。

上田：なかまちテラスではいろいろ若者が欲しているものをハード面で取り入れています。Wi-Fiや学習できる椅子、机等も狭いながら工夫しています。また、カフェが建物の中にあり、障がい者団体が運営していますが、図書館開館日は全て開いています。今まで図書館は貸し出し冊数だけで、図書館としての順位を決めるようなところがありましたが、今はいろいろで滞在型へと変わってきています。公民館と図書館とのコラボで、子どもや若い人向けの企画も取り入れていて、建物自体の物珍しさもあるのでしょうか、お子さんを含めた若い方の利用は着実に増えています。図書館も公民館も利用層が随分若返っていると感じています。

田中：まず、施設そのものが新しく、Wi-Fiの機能もあるし、更にコラボの企画で新しいことを実施しているので、特に若い層を中心に新しい層が増えていると伺いました。新しい層を呼び込むことで、ひいては、その人たちの地域づくりの活動にも広がっていく可能性があります。地域と公民館がつながっていくことを考えると、より多くの人に公民館を利用してもらい、そこからいろんな可能性が地域づくりに生まれていく、そのような意味でそれぞれの取組の中で、新しい層が増えたのはとても大事なことではないかと思

います。私の先ほどの話の（6）になりますが、それぞれの取組を通して、職員の方がどのようにどのくらい活性化したかお聞きしたいと思います。長谷部さんは市民の立場か答えづらいかも知れませんがお願いします。

長谷部：市民の方を育ててくれるのはやはり職員の方だと思います。国分寺市では、今は専門職として採用された方はいないと思います。私としては、できるだけ職員と一緒に企画することを楽しみにしています。

田中：職員と市民と相互に影響しながらお互いに成長しているということではないかと思います。

植野：7年間公民館職員として勤務してきましたが、この事業企画委員会の取組は、目が点になるようなことの連続で、多くのことを学ばせてもらいました。自分の中でも、公民館職員として地域の方々とのつながりを意識しながら、深めてきたものの成果品が事業企画委員会だと思っています。職員として活性化したのかと問われると活性させていただいたと思っています。

田中：植野さん自身が実に上手に市民の方をサポートして、事業企画委員会を活性化させている、それを通してご自身も活性化したのではないかと思います。

上田：なかまちテラスは、公民館は公民館の仕事、図書館は図書館の仕事があり、そのほかになかまちテラスの仕事があると思っています。他の図書館ではない仕事がたくさんあり、それがまた時間のかかる仕事だったりもします。正直他の館の職員よりも仕事の量が多く残業も多いと思います。市民協働がどういったものか考えないと、なかなかLINKSにも関わっていけないので、どれだけ市民との協働が大切かを、新しく異動してくる職員に伝えなければならないと思っています。私もここで卒業になるので、新しい館長と今まで築き上げてきたLINKSをこれからどう広げ、続けていくかが大事なことだと思っています。

田中：上田さんも卒業ということで、3人の方を伺っていて、あらためて職員の方の重要性が見えてきたのではないかと思います。長谷部さんの資料には、職員は地域のコーディネーター、植野さんの資料には、職員のコミュニケーション能力の向上、政策立案能力の向上とあります。新しい試みをする場合には、職員に必要な能力がずいぶんある、そしてまた、職員もその試みを通して能力が向上することがあることがわかりました。ただ、植野さん上田さんの例をみると、休日出勤や残業の増加など、職員の負担増が市民として少し気にかかるところで、我々市民もそれを理解しなければならないと思います。職員が、生き生きと負担感なくできるように、市民と職員が共に公民館を支え、それが地域の活性化につながっていくといいと感じました。3人の中でお互いに聞いてみたいことはありますか。

植野：長谷部さんに。地域会議の取組で地域との密着度が深いと思います。国分寺の公民館は本多の他の取り組みはどのようなのでしょうか。また、後を継いでくれるような、次の世代はいかがでしょうか。

長谷部：地域会議は5館中、他に2館で名称は違うが同様の取組をしています。また、各館に公民館運営サポート会議という組織があり、公民館と一緒に運営しています。次の世代へはうまく引き継いでいければと思っています。

#### 4 質疑応答

田中：会場の方からの質問を受け付けます。

小金井市公運審：なかまちテラスだよりを拝見し、保育園や幼稚園の情報も載っていますが、仲町地区のたよりということでしょうか。

上田：なかまちテラス周辺の地域の情報を掲載しています。

小金井市公運審：全体会で学社連携を講師の方がおっしゃっていたので、個人的に保育園や幼稚園も入ったらいいと思っていました。

上田：情報を提供していただいた地域の保育園や幼稚園に全て配布しています。

田中：学社連携を考えるときに、法律上、幼稚園は学校教育機関で保育園は違っているが、幼保の一体化という流れもあるので、連携していくとすれば、保育園も一緒に考えていいと思います。



福生市の公運審：3人に伺いたいですが、職員と市民が一緒になって企画をしているようですが、福生市では楽しいものには人が集まるけど、難しそうな企画や考えることについては、なかなか人が集まりません。人を集めるための努力や仕掛けなどがあれば教えて下さい。

長谷部：地域会議自体は「子ども」が軸なので、関係者は集まりやすかったと思います。まずは、情報交換からはじめ、事業に向けては公民館を利用し課題を提起してもらいながら企画を進めていきました。当日のイベントは、様々な団体関わっているので、参加人数が多いということです。

植野：事業企画委員会が企画した内容でこれまで職員が企画していたものと違っているのは、単発の講座が多いことです。継続して受講して、サークル化していくという公民館が従来企画していた講座とはまた違ったものではあります。まず、公民館を知ってもらうという事業企画委員会の狙いがあり、単発で楽しいものを実施するという企画が多く出されました。ただし、防犯・防災など、公民館として大切な課題だと認識している講座については、

これからも、根気強くPRしながら実施していきたいと思います。

上田：声掛けをする段階では、職員が地域にポスティングを行ったり、公民館利用者に直接声をかけました。思った以上に「みんなのなかまちテラス」という意識が高く、とてもたくさんの方が集まりました。学校支援コーディネーターの方、図書館の団体、地域の核となる自治会の方、中には隠れた特技を持っている方も参加して、「みんなのなかまちテラス」という、意識づくりが良かったと思います。2年ほど経過しますが、初めは、職員が企画、進行など全て行っていたのが、今は、司会もLINKSの方が行うなど「自分たちのなかまちテラス」というものに変えていければ良いと思います。今後は、市民の方がそれを継続させていくことが大切ではないかと思います。

田中：利用者として参加するだけではなく、公民館を支えていく、運営に参加していくということは、今の地域社会では難しい面があると思います。企画会議などについても、ロの字になって会議を進めるより、ワークショップ形式でお茶を飲みながら検討した方が、皆さん好きなようで、終了後はみんな満足感を持って帰ります。そのように、楽しく汗を流してもらい、楽しく企画を出していただける工夫が必要だと思いました。

国分寺市地域会議メンバー：事業企画委員会を次年度は全館に広げる予定とのことですが、その時に、なかまちテラスLINKSはどのようなのですか、今後、どのように発展していくのですか。

仲町公民館長：なかまちテラスにつきましては、LINKSが既に立ちあがっているので、仲町公民館の場合は、LINKSの傘下というか、一つの部会として、事業企画委員会を実施していく予定です。

小金井市市民：長谷部さんに。資料に異世代交流事業に取り組むことは、少子高齢化社会の地域づくりにとって大きな意味があると、具体的な方策として書かれています。異世代間交流事業に取り組まなければならない課題があったのでしょうか。どうして、取り組まなければならないのかをお聞きかせください。

長谷部：どうして取り組みを始めたかということですが、当時、学校が週5日制に変わるという大きな変化があり、今は居場所と言っていますが、当時は公民館が受け皿になるんだということがきっかけで、公民館運営審議会で審議していました。子どもたちを対象に何の事業をすれば集まるのか何度も検討していました。子どもたちにアンケートを取り、上位のパソコンや英会話から実施しましたが、英会話は1人しか応募が無くて中止しました。このことから、アンケートだけで判断してはいけないと思い、地域の子ど

もに関わっている人たちに集まってもらいました。また、公民館のグループにも声をかけて、何か事業ができないか考えてもらい、並行して進めました。そして公民館のグループの方と一緒に異世代交流事業を始めました。福生市の公運審：学校の週5日制が開始する時に、公民館で何か考えなさいとあったのでしょうか。福生市では、教育長から「子どもを地域に帰すんだ」「PTAの方で何か事業を考えなさい」と言われました。もし、その時に公民館で何か考えなさいということがあったら、福生市でも若者の取り込みができたのではないかと思いますがいかがでしょうか。

田中：当時は、地域に帰すという言い方がされました。国分寺市では公民館が頑張っており組んでいたというお話でした。武蔵野市では、行政が頑張っているいろいろな事業をしていました。福生市ではPTAだったということですが、市によっていろいろな考え方があります。首長と教育長が、どこが担うと良いかを考えて、どの部署が頑張るのが決まると思います。福生市の元館長がいますのでお聞きしましょう。

元福生市公民館長：ゆとり教育の時に、公民館としての取組は行っていました。土曜日、子どもたちがどうしているか、公民館に子どもたちを呼び込むためにどうしたらいいのかを検討し、自然体験学習も事業として実施しました。しかし、子どもにアプローチはしていましたが、教育長にうまく見えていたのかというと、反省しなければいけないかもしれません。けれど、やっていたのは間違いありません。

## 5 まとめ

田中：まとめに入りますが、公民館が地域づくりに貢献するには、出前講座など特別なものを組織して働きかけるのではなく、公民館の機能を活かしながら、公民館に人を呼び込むということが大事ではないかと思いました。呼び込み方が問題で、呼び込む中で、地域の各層の方々が出会い、ネットワークができ、新しいコミュニティが広がっていくことであったり、NPOや市民活動団体などを呼び込むときには、公民館を舞台に地域課題を考えてもらうようなことをして、そこから、地域課題を解決する活動が広がっていくのではないかと思いました。先ほど上田さんが言われました「場」という言葉です。「場」を提供するということで、公民館は人がつながる「場」を提供する、地域課題を学び考える「場」を提供する、そのためにいろいろな人に来ていただくということだと思います。また、新しい層を呼び込むという時に、特

に子どもや若者が今の社会では特に大事だと思いますが、単にお客さんというか利用者として来てもらうだけではなく、ゆくゆくは公民館を担っていただけの当事者のように、主体性を持った市民になっていただくという視点が重要だと思います。

最後に、職員についてです。現在の公民館では、専門職が少なくなってきた、専門性が無くても公民館職員として働き、また一般部署へ異動していきます。公民館は、職員研修の場になるということは、改めて感じたところで、福生市の伊東さんから、公民館に赴任した時、地域のすべてを見て回ったと伺いました。このことは、行政職員として地域の感覚を身に付けられるということで、その職員が一般行政に戻れば、地域活性化を担う職員として育っているのではないかと、ということです。これも、公民館が果たす、地域活性化の役割の一つではないかと思えます。市民が学ぶ、職員が学ぶ、共に学び合う、大人と子どもが学び合う公民館を広げながら、公民館を一つの拠点として、地域がますます活性化すると良いと思えました。

最後に3人の方から一言ずついただいて終了にしたいと思います。

植野：田中先生がおっしゃったように、市民と直接かかわる職場に、若い職員がぜひ来てもらいたい職場です。事業企画委員会が2年経ち、私が退職ということで、今後は新しい職員を委員の皆様にて育てていただくこととなります。小平市では、今後、各分館に事業企画委員会が広がっていきますが、小平市全体が良い方向に向かえば良いと思えます。

上田：通算6年図書館に勤務していますが、図書館職員というよりも、なかまちテラスの職員だという意識が高く、職員だけでは、これだけのイベントはできませんでしたし、とても良い経験をさせてもらいました。横のつながり、仲間づくりが大切だと思えました。

長谷部：公民館大好きでいつも公民館を利用して、本多公民館の喫茶本多で働いています。地域会議で会議室を利用することもあり、ほとんど公民館にいますのでぜひ立ち寄ってください。本日はありがとうございました。

## 閉 会

以上をもちまして閉会とさせていただきます。

私たちの公民館活動がますます発展していくために、お互いに知恵を出し合い、協力し合いながら、ともに歩んでいきましょう。

本日はどうもありがとうございました。どうぞお気をつけてお帰り下さい。

## 第三課題別集会「公民館からの発信力を考える」

### ○討議内容

数多くの事業、講座を実施する公民館にとって、「情報発信」は重要です。これまでも「公民館だより」などの形で、「情報発信」は行われてきましたが、一方で、昨今のインターネットを中心とした情報化社会の到来、SNSの普及などにより、「情報発信」は内容、質ともに大きな転換点を迎えたと言えます。

公民館のこれからの考える上で大切な情報の発信力について、各市の事例なども持ち寄っていただき、ワークショップを通じて意見交換しあいます。

○日 時 平成29年1月21日（土） 午後12時30分～4時

○場 所 福生市民会館・公民館 3階

○助言者 山本 恭仁彦氏（プランナー）

○企画運営委員

佐藤 岳彦（日野市中央公民館）

飯田 正一（日野市中央公民館）

○参加者 34名

- 進 行
- （1）助言者より自己紹介と参加者への質問
  - （2）グループごとに役割分担・評価基準の決定
  - （3）公民館報などの模擬審査（ワークショップ）
  - （4）グループごとの結果発表
  - （5）助言者より講評
  - （6）各市町村の事例紹介
  - （7）質疑応答と意見交流

### 1 討議およびワークショップの概要

#### （1）助言者より自己紹介と参加者への質問

企画運営委員（日野市）のあいさつに続き、助言者の山本さんから自己紹介がありました。自己紹介では「ネットワークとデスクトップパブリッシングに関する知見があったのがきっかけで、全公連（全国公民館連合会）主催のホームページ、広報



コンクールにそれぞれ3回程度、審査員として関わりました」との説明がありました。

その後、参加者のSNS活用を含む情報発信への理解の度合いなどを  
知るため、山本さんがあらかじめ用意した約20の質問項目に挙手で回  
答していただく時間をとりました。

## (2) グループごとに役割分担・評価基準の決定

続いて、山本さんより模擬審査(ワークショップ)についての説明が  
ありました。あらかじめ参加者は3つのグループに分けられていて、各  
グループの机上には、全国30の区市町村が発行している公民館報(全公  
連より借用したものです)を配置しておきました。

まず、グループ内でリーダーその他の役割分担を決定し、あわせてグ  
ループごとに採点方法を話し合いました。前もって山本さんの側で用意  
した評価基準を参考に、採点基準を各グループ5つ前後ずつ選び、それ  
に沿って採点していきました。

(以下は山本さんからの指示です)「グループ全体で最も優れた作品を  
1点、次に優れた作品を2点、その他に推しておきたいものがあれば、  
数点あげていただきます。そして、グループ内の意見等を紹介しながら  
発表していただきます。審査結果に正解があるわけではありませなし、  
今日はまずたくさんの公民館報を見て、話をしていただくということが  
ねらいです。」

## (3) 公民館報などの模擬審査(ワークショップ)

その後、約2時間ちかくをグループごとの模擬審査(ワークショップ)  
にあて、山本さんが各グループをまわってアドバイスをしながら、進行  
をサポートする形となりました。まず30の中から10程度に絞り込んで  
詳細を審査するグループ、あらかじめ制限時間を決めて、順番に回して



審査するグループなど、採点の方法に違  
いはありましたが、最終段階で個々人の  
採点を合計して総合点を算出する点で  
は、各グループともほぼ共通していたよ  
うです。

なお、参加者からは「審査する対象が  
30は多すぎる」「イメージしていた内容  
と違う」といった意見もいただきました

が、各グループとも、それぞれに審査の手順を工夫するなどし、終盤にはホワイトボードなども使って、活発に意見を交わされている様子でした。

#### (4) グループごとの結果発表

※「模擬審査」ということなので、ここでは各グループの審査結果で発表された受賞館名を「ABC・・・」で表示します。

### 1班

#### 《グループの採点基準》

- ・紙面は全体的に見やすく配慮されているか
- ・情報は見やすいか
- ・関心を引き付けるビジュアル・デザイン・レイアウトになっているか
- ・文章表現に読ませる工夫があるか
- ・見出しに工夫があるか
- ・その他のメディア・デジタルへの引き込みに工夫があるか

#### 《審査結果》

**最優秀賞**：A館

1枚の紙でレイアウトしている。躍動感のある写真を使い、動きのある紙面。モノクロでありながら、ここまでできるのかという点、コスパがいい点を評価した。

**優秀賞**：B館

モノクロだが16ページもあり、読み応えもある。表紙にはQRコードがある。スマホでも見られるところがデジタルへの引き込みに工夫が認められる。

C館

写真がたくさんで紙面が明るい。また最終面には、毎月の行事予定がある。地域に関する情報もあり、充実した内容で、かつ毎月発行している点を評価。

**佳作**：D館

写真が上手であたたかい紙面。レイアウト、フォントにも工夫がある。

E館

写真がたくさんあり、レイアウトなども行政っぽくないおしゃれなデザイン。読み応えもあってすごくよかったが、年1回の発行というところが残念。一方、別刷りの毎月の予定表はなかなか見やすいと高く評価した。

## 2班

### 《グループの採点基準》

- ・紙面は全体的に見やすく配慮されているか
- ・関心を引き付けるビジュアル・デザイン・レイアウトになっているか
- ・情報コンテンツは充実しているか
- ・見出しに工夫はあるか
- ・市民が参加しているという紙面構成がなされているか

### 《審査結果》

**最優秀賞**：F館

唯一細いタイプの公民館報。サイズが小さく手に取りやすく、配布の時にポストにも投函しやすく、また手にとって読まれやすい点がよかった。

**優秀賞**：G館

表紙が見やすく、活字が明朝体でなく読みやすい点を評価。

H館

題字に毎回市民の作品を採用している。市民に密着している感じがある。見出しもカルタのようになっている点などに、工夫が感じられた。

(佳作)

**コンテンツ賞**：I館

記事の内容が読み物として楽しい点を評価した。

**生活密着賞**：J館

公民館だけでなく地域の生活に密着した記事が紹介されているところを評価した。

## 3班

### 《グループの採点基準》

- ・紙面は全体的に見やすく配慮されているか
- ・見出しに工夫はあるか
- ・利用者に役立つ情報を提供しているか
- ・親しみ易くなるような配慮はされているか

《 審査結果 》

**最優秀賞** : K 館

レイアウトが綺麗。年1回の発行というのでどうしようか迷ったが。紙面の見やすさ、毎月発行されるカレンダーの見やすさなどを評価した。

**優秀賞** : L 館

モノクロにも関わらず、写真が綺麗で楽しそうな雰囲気が感じられる。

: M 館

内容がすごく見やすい点。最終面のページがカレンダーの行事予定表になっているところもよかった。

**佳作** : N 館

パンフレット型  
というのは珍しいのでその点を  
評価した。



(5) 助言者より講評

各グループによる審査結果の発表を受けて、助言者の山本さんから次のような講評をいただきました。

「今回の審査結果は、非常に興味深いものでした。みなさんすごくクオリティの高い審査をされていたように思いましたが、実際に見て何を感じたかが大事だと思います。今回面白いと思ったのは、内容の評価が高かったにも関わらず、発行頻度などを考慮した結果、評価が下がったものがあったことです。ですが、それらも『まず手に取ってほしい』という点での役割はしっかり果たしていると思います。大事なのはその広報にどのような役割を持たせようと思っているかです。」

## (6) 各市町村の事例紹介

参加者の中にはそれぞれの公民館報をお持ちの方が目立ったので、そうした方々からひと言ずつご紹介いただきました。全部で5市の公民館とNPO法人1団体から、それぞれ広報紙の発行頻度、部数、予算、配布の方法、掲載内容、編集や記事への市民参加の状況などについて説明いただき、さらに発行に当たっての苦労や課題などについてもお話を伺うことができました。

## (7) 質疑応答と意見交流

### 質問1

全国公民館連合会の広報紙コンクールは何のために行われているのでしょうか。よりよい広報紙を作れるようにとのねらいがあるのなら、「作成を業者にまかせているか」、「取材編集に市民が参加しているか」、「カラー・白黒の別」、「発行頻度」など、いろいろな点で区分けをし、審査するというのが筋ではないでしょうか。

また、学校教育と社会教育の連携を考えていく上でも、広報戦略は重要だと考えます。市民向けはもちろんですが、市の中にもアピールして、存在感を示していくことも重要と思います。

### 助言者

広報紙コンクールの目的について自分が答えることなのかどうか、わかりませんが。今後は、ホームページ、広報紙それぞれ単独で行うのではなく、ICTの利活用という立場から総合的な観点が必要になってくるのではないかと考えています。

また、学校連携の話ですが、何かものごとを取りまとめる順序としては、中学校区から小学校区へと取り組んでいくのがよいように、私は感じています。

### 質問2

うちの公民館の講座参加者は高齢者が中心で、どうすれば若い世代が集まるかが課題です。SNSで発信すればいいという意見もありますが。若い世代に向けた情報発信について、ご助言をいただけますか。

### 助言者

デジタルは見に来てもらうまでが一番難しいです。ならば人と人との関係を作っていくながら進めることが大事ではないでしょうか。

パソコン通信の時代は同じ関心のある人たちが全世界から集まっていたのですが、SNS の場合は地域限定などのさまざまなバリエーションもできます。そうやってツールを共有しあうことを、地道にやっていくしかないと思います。なかなかすぐに広がるわけではありませんが、つながりができはじめると、その先につながっていくと思います。

### 関連意見 1

(公民館報の) 編集を市民に立脚しながらやると、発行までに時間がかかるという話もありますが、そこを大事にしていくやり方もあると思います。それと情報をタイムリーに出していくやり方と両方があると思っています。

### 助言者

人がたくさん関わるほど時間がかかるということは、確かにあるでしょう。そこで情報としてすぐ出さなくてはならないものはデジタルの方向に持っていくといった、情報の住み分けが必要になっていくと思います。

どうやって広報紙を配り、そこからホームページに来てもらえるかを考えること。SNS ではどれだけの人が関わり合いになっていくかが大事だと思います。一方、フォロワーは単純には増えません。そこで、情報の共有場所をどれだけ地域の中につくれるかということになっていくでしょう。

大きすぎても小さすぎても掲載されずにいる情報というものが結構あって、そんな情報をシェアしあう。それまで公民館に関心がなかった人たちが、自分たちの子どもの情報を得るためにアクセスしてくる…。といった関係をつくっていかないとネットワークはなかなか広がらないと思います。

一番重要なのは、テキストと写真のクオリティをちゃんと考えておくということです。テキスト、写真などはシンプルが大切であり、例えば広報紙のレイアウトを前提にして作ったテキストは、ホームページでは使いにくかったりするものです。そういった情報の住み分けが、これからはますます必要になっていくと思われます。

## 関連意見 2

公民館だよりは全戸配布しています。若い世代への PR については、悩んでいます。そうした中、講座の振り返りを公民館だよりに載せるようにしています。そういうことを丁寧にやっていると、「自分たちのことをちゃんと見てくれているのだ」というように感じてくれます。そうしたサイクルを循環していくことで紙面はより生きてくると感じています。

## 2 課題別集会を終えて

今回「公民館の発信力」を課題別集会のテーマに選んだ一番の理由は、SNS がこれだけ普及した時代において「公民館の持つ発信力」とは何かを、あらためて考えてみたかったという点にあります。

当初、「このテーマでどれだけ集まってくれるだろうか」という不安もありました。が、実際に行う中でこのテーマへの関心が決して低いことを確認することができました。

今回は「公民館だより」の模擬審査というワークショップに二時間あまりをかけたことで、参加型の課題別集会になったと感じています。一方で「SNS」などその他の「発信」、さらには「公民館という場所を拠点として市民が自分たちの思いなどを発信するために、公民館や職員はどのような力を持っているか」・ ・ ・といったような問題については、十分に意見を交換する時間がなかったと感じています。

とはいえ他市の公民館利用者、公民館運営審議会委員、公民館職員と、それぞれの枠を超えて「公民館の発信力」について議論する機会がもてたことは、貴重な経験であったと思います。

最後に今回、助言者を快くお引き受けいただいた山本さん、担当者として前日よりご尽力いただきました福生市公民館職員の方々、この第三課題別集会に参加いただいたみなさんに、感謝申し上げます。

(企画運営委員)

## 第四課題別集会「少子高齢化時代の公民館のあり方について考える」

討議内容：少子高齢化が進行し、過疎地では深刻な問題になりつつあります。

東京において少しずつ影響が出始め、都市機能や地域との関わり方が変化していくと考えられます。その中で、子どもから大人、高齢者までがかかわる地域の拠点として、公民館が期待されていること、役割が何なのかをグループに分かれて話し合い、皆さんで今後の公民館のあり方について考えてみたいと思います。

○日時・・・平成29年1月21日（土）午後0時30分～4時

○会場・・・福生市さくら会館2階 第3集会室

○担当・・・東京都公民館連絡協議会委員部会

○参加者・・・42人

○助言者 佐藤 一子（東京大学名誉教授）

○企画委員 以下都公連委員部会運営委員

川村 光弘（東大和市・委員部会長）

大澤 俊則（昭島市・委員部会副部会長）

白崎 好邦（町田市）

宮澤 もと子（小金井市）

中村 眞一（小平市）

畔上 栄輔（日野市）

長谷部 豊子（国分寺市）

大井 利雄（国立市）

関根 孝明（福生市）

日向 正文（狛江市）

野間 春二（西東京市）

以下都公連委員部会事務局

宮地 勇輝（東大和市立中央公民館職員）

内藤 茜（東大和市立中央公民館職員）

### 1. 委員部会長挨拶

定員満席になったことを感謝します。レジメの具体例はいずれも地域文化を次世代へ継承するという優れたまちづくりの事例です。佐藤先生著「地域文化が若者を育てる」に詳しく紹介されています。公民館が半歩でも一歩でも明るい町づくりにつなげていければと思っているので、活発な討議を期待します。

## 2. 論点整理 助言者（東京大学名誉教授 佐藤一子氏）

戦後、多摩地域の中で市民の願いを込めて踏み出していった公民館を、次世代へどう繋げていくかという時代を画する時にある今、都公連の皆さんが協力しながら学ぶ場を持っていることは、公民館活動を支えていく大きな力になります。



第四課題別集会は、必ずしも高齢者自身がどう学ぶかという問題に焦点を当ててではなく、地域が

少子高齢化という波に洗われ、大きな構造変化を起こしている地域の変化を全体として捉えながら公民館のあるべき方向を探っていくため、いくつか話題提供をさせていただきます、5つくらいの論点でグループ討論をしていただきます。

始めに、この課題別集会のテーマであります「少子高齢化時代」というものを簡潔にどういう問題として捉えたらいいのかということです。日本の難しさというのは、高齢化になっていく速度が余りにも早く、高齢化率が20年くらいで一気に30%くらいになってしまったということで、高齢化の進展に追いついていけない社会というところが特徴的だということです。

それから高齢化以上に少子化が深刻だということです。少子化というのは人口の絶対数が減り相対的に高齢者が多くなることで、要は、日本の社会に働き手がいなくなるという実態が非常に深刻になります。日本の社会は信じられないほどの深刻な人手不足になると言われています。

ヨーロッパの諸国においても人手不足は移民の受け入れによって補われていますが、移民の受け入れが矛盾をきたし、民族としての一つの国家として、多文化共生が非常に出来にくい社会になり排外主義が高まっています。しかし、排外してしまうと日本が直面しているような問題が出てきます。少子高齢化というのは、単純にお年寄りが元気で暮らせる社会であればいいという簡単な問題ではありません。

働き盛りの方や未成年の世代がこの人口構造の中で希望を持ちながら人生を歩んでいけるような日本社会であり続けられるか。そうした問題がこの少子高齢化という問題を立てた時に非常に大きな問題になります。

なぜ少子高齢化社会になってきたかを、現実の地域社会の中から思いつくことを出し合い、その構造変動の要因ということの議論をお願いしたいと思います。高齢者が元気で長生きすることは大変いいことですが、子どもの生まれない社会というところに大きな問題があると思います。それを修復していこうという動き

として、庄内地方のグリーンツーリズムがあり、飯田市の人形劇があり、遠野市の昔話があります。

最後に、今必要なことは持続可能な地域って何なのかということです。高齢者層は実数として地域に沢山いるし公民館の利用者としても層が厚いのですが、その方々が本当に少子高齢化の中で持続可能な地域づくりへ向けた十分な対話力とか世代間との交流のところで、積極的な活動が生み出されているのかどうかという視点から見つめていただきたいと思います。

また、子どもたちも含め皆が地域の文化、歴史的な意義をどのように将来に繋げていくかという視点から地域課題、地域づくりの方向性を公民館の学習活動として根付かせるにはどうしたらいいか、公民館が地域文化、地域課題、他世代の交流で有益で魅力的な事業を動かしているのかを見ていただきたいです。

また、これからの子どもの生育の中でますます社会体験が重要になってきます。学校も含めたアクティブ・ラーニングという、体を動かしながら経験を通じて学ぶことによって、社会の中で自分を認識するきっかけをつかみ、そのことによって着実な世代関係になっていくと思います。

以上、問題提起をさせて頂きましたが、それではグループ討論をしていただきたいと思います。

### 3. グループ討議結果

#### 3.1 討議テーマ 1～5のテーマについて各

グループで話し合ってみる

(1) 少子高齢化社会の原因をどうとらえるか：

各地の実態から考える

(2) キーワード① ゆとり・生き甲斐・相互の関わり合い・社会参加

(3) キーワード② 個性・多様性・多文化性・環境との共生

(4) キーワード③ 対話力・問題解決能力・自治能力

(5) 持続可能な地域づくりにむけた公民館の役割

#### 3.2 各グループ討議結果発表

A班：現状について

①経済面

- ・戦後の産業構造の変化
- ・雇用（正規・非正規）・・・働き方
- ・収入が不安定

- ・（子どものできない人の）不妊手術にお金がかかる

## ② 価値観の変化

- ・結婚する意義・・・しなくても困らない
- ・親が子どもにあまり介入しない、逆に介入しすぎる
- ・子どもを地域で育てるという考えがなくなる（自分本位）
- ・世間体を気にしない人が増えた

## ③ コミュニケーションの手段が違ってきた

- ・地域に縁結び役の人がいなくなった
- ・助け合いの精神が薄れている
- ・子育ては楽しいものということが伝わらない

## 課題に対する解決策

- ・公民館が地域づくり等の事業に取り組む
- ・地域の大学との連携
- ・市民と公民館が一緒に取り組む事業の実施
- ・情報の発信が大切
- ・地域の歴史に即した講座を行う（昔の生活、歴史等）
- ・公民館で出会いの場を提供、男女の出会いの接着剤となる

## B 班：現状について

### ① 価値観の多様性

- ・結婚する必要がない
- ・仕事が楽しい
- ・自立できている
- ・一人が楽しい
- ・子供がいなくてよい夫婦での時間

### ② 子育てに対する不安

- ・経済的面
- ・子育て支援 サポートが足りない

### ③ 出会いがない

- ・他人とのつながりが希薄



## 課題に対する解決策

- ・子どもたちの集まる場 図書館と児童館が一体となる  
公民館まつり、児童館があると人は来る
- ・防災 ひとり暮らしだと拒否される場合もある
- ・伝統芸能の継承 地域にそのような文化があるかないかで限られる
- ・外国人との共生

- ・すぐには結果がでないけどやれたらいいね
- ・リーダーになれる人がいるか、育てられるか、地域ができるか

### 持続可能な地域づくりにむけた公民館の役割

- ・今日行く場所＝公民館＝居場所  
社会教育に結びつかないと公民館が利用できない
- ・ふらっと寄れる居場所があると良い、自分の都合で
- ・若者とは感覚がちがう　ハード面でも若者が来るようにしたらよい
- ・公民館の保育のあり方もかわってきているのかな  
公民館デビューのプログラム
- ・小さい時から公民館が身近な存在だと良い
- ・マンネリでも良いのでは。継続
- ・学校との連携、公民館を知るきっかけ　伝承遊び
- ・公民館に子どもたちが戻ってくるように公民館を知ってもらい、そのために公民館を今の世代は維持していく

### C班：現状について

- ・子育てする環境が整っていない
- ・子育てが大変なため、1人で手一杯で余裕がない
- ・まず、子どもを産むどころじゃない、共働きではない
- ・不安な社会、貧困化や格差がある
- ・女性の社会進出、働きたい女性が増えている、自立した女性、働きながら子育てをする環境が不十分である
- ・日本の社会がいっぱい問題を抱えている、ゆとりのない社会
- ・具体的に解決策が出ても、行政が縦割り過ぎて実行できない

### 課題に対する解決策

- ・地域で子どもの面倒をみるという流れが必要
- ・学校と公民館を一緒にすればよい（ハード面）
- ・子どもから挨拶する町へ（先生と公民館がコラボして、子どもたちが挨拶するようにする）
- ・給食を高齢者と子どもと一緒に食べる
- ・健康な高齢者を増やすことで、医療費等若い世代が負担する者が減るのではないか
- ・アクティブシニアを増やす、潜在アクティブシニアから。そのためには魅力的な講座（例えば、趣味・防災等）

### D班：現状について

- ・住民同士やサークル間のつながりが弱い

- ・ 公民館の役割を若い人が分からない
- ・ 各市は工夫して行っている
- ・ その場限りで世代間の交流が少ない
- ・ 同じ人間同士でずっと交流を続けるのは難しい
- ・ 交流した経験が大事
- ・ サークルが内輪だけになっている→サークル同士のつながりがない  
パソコンでの部屋取りが、つながりをなくした(昔は窓口で顔をあわせた)
- ・ 設備や施設の充実、改修が求められている  
インターネットの環境、きれいなトイレ、バリアフリー、保育室

#### 課題に対する解決策

- ・ 公民館に親しみを持たせること
- ・ 信頼を得られる職員（専門性）を目指して
- ・ 広報の充実をはかる
- ・ 地域の教育力をどうつけていくか
- ・ 親子と遊ぶ講座、子育て親への講座充実

#### 持続可能な地域づくりにむけた公民館の役割

- ・ 各世代の出会いのあるつなぎの場をつくり、次につなげる
- ・ 若い人と年寄り、子育て中の親が顔を合わせる場としての公民館から始まる
- ・ 人が集まる公民館であれば継続し次世代につながる
- ・ 積み重ねたことを今後もうることが次につながる
- ・ 持続可能な地域づくりのためには、職員と市民が一緒になって課題解決に向けて、公民館で活動する

#### E班：現状について

- ・ 三多摩テーゼに少子高齢化の現在の問題の取り組みを一つ加えたい
- ・ みんな自分の地域の公民館を最大限に使いたい、愛着をもっている
- ・ 小中学生一ゲーム 公民館は何をすところかを伝えたい
- ・ 他の無料で使える場が増えた、公民館認知
- ・ 公民館と高齢者
- ・ 若者の仲間づくりの指導が必要ではないか
- ・ 場所がある一楽しめる一組織化・事業化するのは？若者に企画をさせる
- ・ 公民館の使い方 話合い一卓球を例にして
- ・ 世代ギャップ一若い世代のダンスよい

- ・子ども連れのお母さんも参加できる環境づくり—子どもをあずける部屋

#### 持続可能な地域づくりにむけた公民館の役割

- ・専門職の職員と市民が一緒になって地域の課題を突き詰めていく
- ・公民館をますます大事にして地域の課題解決のために使っていきたい

#### 4. 助言者佐藤先生によるまとめ

今日は、夫々の日頃の立場を忘れて議論を楽しむことができたのではないのでしょうか。少子高齢化というテーマであります、高齢化と言うよりはそのまま放っておいたら地域が非常に困難になっていくということを現実に見据え、少し視点を変えて子どもたちや働き盛りの世代はどんな風に考えているか社会構造の問題として、あるいは働き方の問題や生活の問題として目に見えていることを出し合うという、このこと自体が一つの社会問題についての学習であり、皆さんが着眼されたことが多分講座のテーマなどに取り上げられ、地域の近未来に皆で知恵を出し合って、立ち向かっていくための基礎勉強をしましょうよ、という流れが出来てくるような議論の深まりが沢山あったのではないかなと感じています。方向性の中で公民館の持っている力というのを皆さんが実感されており、そこで活動されて色々な歴史とか経験をお持ちなので、すごく分かっていらっしゃると思いました。

持続可能な地域づくりを進めるためには、公民館が次の世代にしっかりと認識されて、活用される、そういうバトンタッチ、あるいはともに集う世代交流、あるいは協力し合う連携の場としての公民館の意義というものを皆さん、色々な角度でご検討されたと思いますが、各公民館で一つでもいいから実現していくアイデアとしてご活用いただければと思います。

#### 5. 閉会の挨拶

今日はどうもありがとうございました。三時間半にわたって活発な意見を出し合って、まとめることができて良かったのではないかと思います。これをこの場限りでなく、引き続き継続してやることが何より必要であると思います。このグループ討議を踏まえましてこれからも深く緊張感をもって、公民館活動をやっていきたいと思いますのでよろしくお願いします。佐藤先生には9月3日の講演会と今日と二回お越しいただきましてどうもありがとうございました。拍手でお送りしたいと思います。

第53回東京都公民館研究大会 参加アンケート集計表(総合計)

回答数 188

○ 回答されている方についてお尋ねします。

□性別

男性	女性	未記入	その他
94	88	5	1

□年齢

10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	未記入	その他
0	7	14	32	50	43	40	2	0

□お住まい

八王子市	立川市	武蔵野市	三鷹市	青梅市	府中市	昭島市	調布市	町田市
4	6	1	0	0	1	11	4	8
小金井市	小平市	日野市	東村山市	国分寺市	国立市	福生市	狛江市	東大和市
24	12	4	0	19	5	18	7	5
清瀬市	東久留米市	武蔵村山市	多摩市	稲城市	羽村市	あきる野市	西東京市	瑞穂町
0	0	0	0	1	3	4	25	1
日の出町	檜原村	奥多摩町	東京都23区	東京都島しょ	東京都以外	未記入	その他	
0	0	0	2	0	9	11	1	

1 この大会を、どのような方法で知りましたか（複数回答可）

18	①ポスター・チラシ
1	②ホームページ
10	③各市の広報紙
135	④職員から
5	⑤友人・知人から
30	⑥その他
10	未記入

※⑥その他の内容

・研修の一環・職員として参加・都公連加盟市職員  
 ・職場・公運審(5)・都公連から・業務として  
 ・公民館職員・サポート会議・委員部会

2 東京都公民館研究大会への参加は何回目ですか？

はじめて	2~4回目	5~9回目	10~19回	20回以上	未記入	その他
69	69	22	10	7	7	3

3 午前中の全体会（基調講演）について伺います。（○は1つのみ）

(1) 参加してみて感じた内容について

とてもよい	よい	ふつう	あまりよくない	よくない	未記入	その他
59	83	33	4	0	9	0

(2) 全体会（基調講演）についての自由意見（別記）

4 課題別集会(分科会)について伺います。（○は1つのみ）

(1) あなたの参加した課題別集会は？

①第1	②第2	③第3	④第4	未記入	その他
54	73	25	35	0	1

(2) あなたの参加の動機やねらいと、実際に参加してみて感じた内容について

とてもよい	よい	ふつう	あまりよくない	よくない	未記入	その他
56	94	25	5	0	4	1

(3) 課題別集会（分科会）についての自由意見（別記）

5 大会全体の感想や今後の公民館活動のあり方についてなど、自由にご記入ください。（別記）

## 全体会（基調講演）についての自由意見

- ・とてもわかりやすく成果と方向性はとてもわかりやすいお話しでした。
- ・公民館と学校を一緒にして運営していくという講師の言葉が印象に残った。
- ・具体例が身近な話題でわかりやすかった。
- ・学社一体教室の推進に期待するという先生のお話、よく分かりました。これからの公民館のあり方として新しい視点がいただけた。
- ・現状をわかりやすく、基調講演ということで展開となる事例を出して頂き良かった。そもそも学校教育と社教が分かれている理由意義は何か、触れてほしかった。
- ・三多摩テーゼは初年度に学んだが、新たな気持ちで聞けました。これからの社会教育についても学ぶことができ良かったと思います。
- ・「学社一体」型は、どこから始めたらいいのかな・・・と考えました。（ホール、寒かったです）
- ・地域と学校のつながりを推進、公民館や地域会館の役割は待っているだけの時代は終わり。「三多摩テーゼ」四つの役割を前向きに宣伝していけると良い。
- ・「これから」のことについて、わからなかったことの内容が多くあり、とても参加してよかった。
- ・やや散漫だったが、言いたいことは理解できた。「これから」の部分、論点をしぼった方が良かった（時間も短いので）
- ・学社一体型、言われればその通りと思うが、今まで何故進めて来られなかったか、支障は何なのか。
- ・学社連携は以前から言われている事だが、ストックマネジメントにおける学校連携は新たな指摘であると思います。今後、アプローチできる方法を考察したい。
- ・PPが細かく見にくかった。
- ・これからの老人問題について積極的に取りくみたいと感じました
- ・”学社一体”は正に目から”うろこ”です。できそうでできない簡単なことかも知れませんが。学校教育と社会教育は一体化されてこそ継続的な地域社会発展につながりますよね。
- ・公民館職員としての日も浅く、こういった大会の参加もはじめてでしたが、大変わかりやすく勉強になり、参加して良かったと思いました。
- ・講演の流れに合った資料がほしかったです。
- ・学社一体を絶対的に進めるべき。
- ・産学連携型の公民館など新しい形を提案され、今後の公民館のあり方検討の参

考になった。

・わかりやすく、方向性を明らかにしながらのお話で、楽しく、なおかつ多くの学びがありました。

・学社協同も考える必要はあると思うが、“学”から離れて、“社”独自の視点、活動も大事。それでこそ豊かなものが生まれる。

・公民館が地域に必要とされ、期待される存在となるためにも、戦略的に学校教育と連携していく必要性を感じた。

・資料の文字が小さくて見えにくかった。講師が「手元の資料にない」と語った資料が載っているのもあった。資料と映像のパワポの内容がリンクしていると分かりやすいと思った。講演の内容自体はわかりやすかった。

・学社一体については、今学校は子どもの安心安全に対して、ナーバスになり、地域の人を不審者扱いにするところが見受けられ難しいものかあ。

・公民館と市民との関係の大切さをもう一度考えてみる必要性を教えられたのは参加して良かったと思います。

・学校と公民館、地域を一体化する取り組み、とても感銘した。地域が一体となって社会教育を作り上げていけると思う。

・学社一体運動の提唱に全面的に賛成。文科省ですでに予算化されていることを知り心強い。今こそ社会教育の力が、子どもには必要と考えていた時で、その方法として学社一体の在り方が有効であろうと朝岡先生のお考えに、その通りとうなづきながら拝聴しました。保育園や幼稚園も学に加えては？とも思った。

・社会教育、生涯教育について、法的根拠の説明など分かりやすかった。

・福生紹介ビデオが良かった。

・現在進行形の話が聞けて良かった。

・資料に必要な部分が全て載っていたので分かりやすかった。話の進行順に並んでいるともっと良かったと思う。

・地域学校協働本部への文科省施策の流れ、具体的提案は参考になりました。具体的な学校との協働については、公民館サイドからのアプローチも大切ですが、教育行政の教育計画に位置づけたり、学校長との地域経営の十分な話し合い、理解が必要ですね。飯田市と大学との連携、学社融合の工夫はすごいですね。

・学校との連携が難しいと思った。

・小金井市の場合と比較。小金井市では一般市民から企画実行委員として選ばれた人が事業を企画する方式のため、市民の意見が良く反映されるメリットがあると考えています。

・ポイント把握に困惑した。内容が高すぎたのかなあ。私のレベルが低いようです。

- ・学社一体は行政の公共施設マネジメントの発想に取り込まれないように、教育、特に社会教育が何であるかをしっかり捉えないと危険だと感じます。
- ・学社一体型総合地域教育についてもっと話を聞きたいと思いました。トランプ氏の影響に対する懸念は同感しました。
- ・学社一体化の機運を知ることができ、公民館の役割や使命の向上を社会教育の必要性を感じ、役員を担うものとして心強く思いました。
- ・資料のデータはできるだけ今年度に近い数値を添付してほしい。2016年なのに2008年までのデータでは問題点がボケる。
- ・市民協働の事例があまりなかったように思います。
- ・短い間でズバッと分かりやすい講演でした。
- ・オリジナルな部分である新たな公民館像のご提案について、もっと深く話していただきたかった。講演内容を追いながら資料を見るのが難しかった。講演内容とリンクし太もっとシンプルな資料提供について運営側から要求してもよかったですので話でしょうか。
- ・大学の事情を紹介されたので良かった。学校との連携は公民館の生き残り策の一つと納得。
- ・図書館が減らずに公民館、学校が減っていく実情を聞いて危機感を感じました。
- ・3つの公民館に対する提案は参考になりました。
- ・学社の連携は少しずつ進んでいますが、大学がもつ知、研究知を地域に生かすことは互いに有効だと思う。大学も地域の実際、実態を研究ベースに置くことができる。
- ・中教審の最新の答申の概要もうかがえてとても良かったです。
- ・親しみやすく分かりやすいお話の中に、これからの公民館を社会の中でどう位置づけるかの提案があり、前向きな気持ちになり、具体的なイメージも湧いてきました。どうもありがとうございました。持ち帰って利用者みなさんとも共有したいと思います。
- ・朝岡先生の「学社一体の方向に公民館の可能性有り」は、小生の日頃からのあるべき好ましい想像と合致し、嬉しく思いました。

## 課題別集会（分科会）についての自由意見

### 第1 課題別集会

- ・高齢者の学びと講座作りの講演の講師の方について、講師の話し方、ポイントをしばって解り易く伝えて欲しかった。資料にたよりすぎておられるようで、インパクトなかったと思います。又、テーマをしばってもらおうとよかったと思う。

調布市の活動はとても解り易くすばらしかったです。司会進行が時間がないことを度々言われていたので質問ができなかった、残念です。

・公民館利用者の多くが高齢者であることから講座についての組み立ては重要である。とてもためになるお話でした。ぜひ実践していきたいです。

・第1課題別集会、高齢者対応でどこの館でも苦勞して取り組んでいる様子が伺えた。

・もっと時間をとって今持っている問題（課題）について掘り下げたかった。

・ディスカッションがあると良い。

・事例発表が少し長かったように思います。発表に対しての参加者とのやりとりや講師とのやりとりの時間が少なかったのは残念だと思いました。参加した人々とのグループワークがあると、テーマについて共有ができたのではないかと思います。

・他市の高齢者対象講座の現状や課題が聞けたので参考になった。

・発表のあった3市それぞれの内容がユニークで特色がありよかった。

・他市の発表を聞く事でとても参考になります。調布市の事例発表は特に具体的で良かった。企画運営者である発表者の熱意が講座に参加される高齢者にも伝わっていると感じられました。人口規模の差はあれ、どこも（各市）大変努力されてると思いました。

・高齢者対象講座を担当しております。他市での内容も詳しく聞く事ができ、これからの事業に取り入れていこうと参考になりました。ありがとうございます。

・飯塚先生のお話からもう少し高齢者の身体的変化などや認知症のことなども聞いてみたいと思いました。

・後半の各市からの発表は一覧表になったら良いなあ、、、と。とても知りたいことでしたので、立川市や調布市のような資料配布だけでもあったらわかりやすいかと思いました。

・公民館としての活動と他の団体等の住み分けに苦心しているのか？意欲はあるが、自力で活動には無理のある方、年寄りだからと控えてしまう方達をどうやって救い上げていくかが課題でしょうか。

・各市の高齢者に対する事業作りのご苦勞とご活躍状況がよく分かった。担当している身として考えさせられる事例もあり、来年度に向けて考えていきたいと思えます。

・特色がない。これが核（ポイント）だと言うものが少なかった。調布は良かった。

・高齢者の今後益々、健康で楽しく、長寿を全うする為にも社会全体として考えるべきもの、但し、家に引きこもっている人を如何に参加させたらよいか

課題。

- ・"立川市寿教室について、開講日数も多く会員数も多く、芸能フェスティバルやバスハイク内容もりだくさんで見学したいと感じました。パワポの資料がとても見やすくわかりやすかったです。
- ・飯塚先生のお話の時間が短かったので、もう少しききたかったです。
- ・調布の事例は、少ない予算の中、内容、工夫されていて、参加されている調布市民の方は幸せだなと感じました。
- ・小金井の事例では、参加者の感想をしっかりと次年度に反映していて見習いたいです。
- ・高齢者に対するコミュニケーションをそれぞれ色々な方法にて行っている事に対し、年齢的に対応していると思う。あとは継続です。
- ・立川市、調布市の事例を聞いたことは大変良かった。他にも様々な自治体の事例を知り、自分の自治体の取り組みを見直すよい機会になった。
- ・調布の職員の取り組みの熱意が伝わってきて嬉しい。
- ・様々な市の状況を伺い、どこも同じような感じなのだなと知りました（70代中心、講座内容など）。
- ・何か新しいヒント、今後の方向性みたいなものはあまり見えてこなかったのは残念。でも勉強になりました。
- ・各市とも高齢者にとって、その人らしい生活を続けられるよう、介護・福祉・あるは医療などについて、住みやすい地域にするための情報やネットワークづくりを目的に事業を開催されていることが大変参考になりました。
- ・認知症予防を主体にする方に移行する必要があると感じている。

## 第2 課題別集会

- ・他市の事例が聞いて良かった。田中先生のお話はとてもわかりやすかった。現場で人とのつながりを大切にしながら市民に喜ばれる講座を作っていきます。
- ・田中先生がおっしゃっていたように、事例報告が先にあったことで、先生のお話もとても具体的なことをイメージしながらお聞きすることができました。多くの気づきがありました。田中先生のキャラクターで楽しくお聞きできました。
- ・パネリスト、講師の方、それぞれの方のお人柄から出てくるお話、言葉が面白く感じ入りました。
- ・これまでの基本を大切にしながらも、新しい取り組みに挑み、さらに様々な市民をつなげていく重要性に気付きました。
- ・地元の地域会議に参加しているので、参考になる話が聞きたかったが、午後の分科会の時間がたっぷりあって、充実した時間が過ごせた。

- ・実行委員会、LINKSの人の集め方は、やはり大規模で素晴らしいと感じました。
- ・事例報告では、各市積極的にな取り組みをしていて、とても勉強になった。基調講演では、公民館は学びを通して地域づくりに寄与する立場を再確認できてよかったです。
- ・田中先生のお人柄もあり、楽しく受講できた。内容も分かりやすかった。事例報告者の方々のお話やディスカッションも、実際に携わっている中から出てくる“生”の声や意見が参考になった。
- ・分科会が少なく大人数で話し合いができなくて残念です。でも現状を考えると仕方ないですね。せめて参加者名簿（どの市から来ているのか）が欲しかったです。
- ・助言者の先生にとっても好感が持てました。最初の事例報告者の方、早口で話がわかりずらかったです。他人に伝えるのは難しいです。
- ・国分寺市本多公民館の地域会議の取り組みにとっても興味を覚えました。子どもたちを公民館に取り組む方法のヒントをいただきました。
- ・なかまちテラスは外見も中身もとても素敵ですね。確かに若い人が好きそうです（Wifiとカフェで）。一度訪れてみたいです。田中先生のお話も面白かったです。
- ・地域の多くの方々と話が多くできることの職場は公民館が一番です。
- ・小平市のリンクスについて驚きと、西東京市の財政力を考えて困ることばかり。
- ・事例報告もたくさんあり、活気がありとても有意義でとても良かったです。
- ・田中先生のお話が楽しかった。「公民館が職員研修の場となりえる」その通りだと思いました。
- ・地域とのつながりが今後の公民館の重要性を認識した。特に新しい層の増加で、鈴木町の発表で相当苦労されてたことで大変だったと思う。
- ・アットホームな雰囲気良かった。また、事業企画委員会など、今後の公民館でどのようなやり方をしていけばよいかを考える機会となった。
- ・市民の話し合いの「場」をどのように設けるか？どのように市民に来てもらうか、大切さを知るとともに、常に工夫しなければならない点を改めて感じました。
- ・小金井市は市民代表の企画実行委員制度があるが、より幅広い層の人をいかに多くの団体の代表を公民館に関わりを持たせることができるかがポイントと思う。本多の地域会議、小平の公民館事業企画委員会の活動は参考になった。また、田中先生の話は分かりやすい内容であった。今我々が目指している公民館像、学びと地域づくり、仲間づくりへの貢献をする社会教育の場としての位置づけが間違っていないと感じ、今後の活動に役立つと思う。

- ・なかまちテラスの設立（ソフト、ハードを含めて）経過は初めて知りました。田中先生の講座は大変わかりやすく、地域づくりのエネルギーがわいてきますね。
- ・当市とは公民館の形態が違うところもあるが、取り組み姿勢が良く理解できました。参考にさせていただきます。ありがとうございました。
- ・公民館の第1の役割が「つながりづくり」だと強調すれば、公民館の学習の場の保障、公民として何を学ぶのかの本来の役割を見失うと思います。
- ・パソコンについては、もう少し準備をていねいに。人数が多いのでみんなでワークショップ方式で議論することができなかつた残念でした。
- ・公民館を市民のあらゆる課題を受け止める「中心」になれば、公民館が地域づくりに貢献できると思う。

### 第3 課題別集会

- ・自館の公民館だよりに持ち帰れるものがあってよかったです。
- ・広報誌選択のワーキングであったが30冊の検分選択の必要性があったか。冊数をもう少し絞り込んでおいたほうが議論に充てる時間が増える
- ・全国の市ではなく、参加自治体の広報から学ぶことを期待していました。残念です。
- ・資料30点多すぎる→10点くらいに絞るべき
- ・内容は意外でしたが、違った視点から物事を見たり発見できてよかったです。
- ・「発信力」の捉え方ですが、広報というとらえ方をしていなかったので少し思っていたのとは違いました。
- ・普通は交流の無い公民館関係者と交流できてよかったです。
- ・特徴ある公民館だよりのむずかしさ、どれも類似した紙面になっていく。
- ・広報誌作成に創意工夫があり、参考になった。
- ・フリートークもグループ別におこなってほしかった。
- ・これだけ多くの館報を目にする機会はなかったもので、それぞれの特徴、メリット、デメリットを検討しやすく貴重な経験となりました。館報に掲載すべき情報、他のペーパーとのすみわけなどについてももう少し議論を深めたかった。
- ・他地域の公民館報を拝見できて大変良い機会となりました。ただ、今後どこを目指せばよいかますます混乱してしまいました。自分の思いと他の方の意見、なかなか違うものですね。
- ・ワークショップが充実していて、かつ楽しんだ。評価者の視点を体験することで今後の広報活動に活かせる。ネットワークは結局人と人とのつながりと分かった。
- ・全国の公民館報を実際に見て審査会を行うという斬新な取り組みから見えてく

るものを学べ大変参考になりました。

- ・30部の館報なかなか見ごたえがありました。知らない人同士2人一組でポイントをつけたらもっと楽しいのではと思いました。
- ・発信の対象が市民でしたが、役所内の議員さん、市長さんへの情報発信もとても重要思っています。
- ・内容は興味があり、良かったが時間配分に問題があったのではないかな。
- ・SNSの発信について学びたかったです。
- ・デジタルと紙の住み分け、というのがとても勉強になりました。
- ・(全公連の)広報誌のコンテストの意味が分からない。目的意識が違うのではないかな。発信力の課題は必要でしょうが、この点広報誌の検討だけで講座が終わってしまった。

#### 第4 課題別集会

- ・時間がなかったが、楽しかった。
- ・佐藤先生の助言が適確で解り易く、大変参考になりました。
- ・様々な立場の人ときたんなく話すことができ、良い経験になりました。
- ・多摩の他の市の参加者の意見を聞く機会を得て、良かったと思います。それぞれがそれぞれの活動をしているが、思いは共通。高齢者と若者の交流の取り組みが必要とのことでした。
- ・グループの中でも特定の方の意見が強く沢山の課題も有り、最終的にはやっとな一つのテーマに納められました！
- ・職員、公運審、市民、企画実行委員など立場のちがう中での意見交換ができたことが大変よかった。
- ・様々な年代の方々の意見を聞くことができたので大変参考になった。会場の規模の問題もあると思いますが、もう少し少人数で討議できたらなおよかった。
- ・グループで討議することは勉強になった。
- ・グループ別でいろいろな意見を聞くことができ、考えていることは皆一緒だなと思う。
- ・グループ討議は内容がふかめられてよかった。いろいろな立場での意見がきけてよかったです。こういう場は必要です！！
- ・7人の方と意見交換できとても良い体験となりました。
- ・大変議論が深かった。時間が十分とれたことがよかった。
- ・公民館について見識の高い人々と話し合えて楽しかった。
- ・佐藤一子先生のお話はとても勉強になりました。グループワーク討議もとても勉強になりました。

## 大会全体の感想や今後の公民館活動のあり方についてなど。

- ・東京都公民館大会としてふさわしい会場と内容であった。福生市の底力を見たような気がした。これからも益々発展して行く事を希望する。午後の分科会の時間設定が長く多く（4ヶ所）の事例があり疲れた。2つくらいにしばっていただきたい。
- ・非加盟の自治体にもどんどん参加してほしい。
- ・三多摩 26 市のうち、20 市以上には参加してほしい。
- ・初めての参加でしたが、研究大会実施にともなう会場及び内容はやはり良かったと思います。時代も変革と同時に流れている事から、更に新しい組織行動を考えて行く事も大切だと思います。情報収集するにはこの大会は大切です。
- ・どの地域でも課題として捉えていることと思います。それに対して、人とつながり、地域とつながることが大切であり、有効であるということがこれまでの実践でも証明されています。その具体的な例として、シニア講座や〇〇大学のような公民館事業がありますが時代共に参加者のニーズも変わり常に社会的背景を考えながら事業の検討をしていくことが求められます。また、シニア対象ではあるけれども、その学びがシニア層だけではなく、多世代と交わる内容が考えられれば公民館ならではの学びになるのではないかと考えます。本日の実践報告を今後の事業に生かしていきたいと思います。
- ・大会の準備から当日の運営までありがとうございました。予算が削られ施設の老朽化が進み、ライフスタイルが変化する中、様々な面から公民館運営について考え直すじきなのではと感じています。
- ・私もそろそろ高齢者の仲間入りをするに当たり、「あればいいな」と思う講座を仲間と共に実際に作り上げていければと思っています。今後をより健康的に生きていくには講座が大切なものとして発展していくことを望むところです。
- ・公民館の今後が問われている。基調講演にもあったように国の行政、財政に応じた柔軟な対応が必要と思った。
- ・今日の基調講演の内容を理解して、振り返ってみてそれを実現することが必要と思う。三多摩テーゼの実行すること。
- ・時間が長い。午後 1 時～4 時ぐらいで良いのでは。各地区の公民館の職員の方が相互に各地区の事業（高齢者学級）に 1～2 回参加してみて、感想を述べるのが良いではないか。各地区の説明だけではなく良い効果が互いに生まれてくると思います。
- ・大変有意義な研究大会でした。午後の課題集会中休みがあったら良いかと思えます。

- ・本市は公民館連絡協議会に参加していないが、参加して相互交流を深め、よりよい事業を展開していかなければならないと感じた。私は非常勤職員なので参考にさせていただきながらあり方について進言していきたい。
- ・公民館という名称のイメージがまだまだ堅苦しく、敷居が高く感じられ、存在は知っているが、気軽に参加できない。そういう観点から「公民館」自体のネーミングも親しみ易くしたり、転入者主体の交流の場をつくったり、場を提供して人と人をつなぐ役割があると思います。図書館が高齢者の居場所にもなっていることから、公民館や地域の会館に図書館が併設されたり、いろいろな要望や機能が提供できるようになると、利用者の口コミも期待でき相乗効果になるのでは。高齢者は「健康寿命」を全うすることを感じることから、公民館事業として発信していただきたいと思います。
- ・事務局の方、おつかれさまでした。
- ・高齢者講座について他市のあり方、テーマ、どんな講座を行っているかなどのお話を聞いて良かったと思います。市民大学、シルバー大学などあるが60代中心にやれないか後期高齢者が多いなど、男性が少ないなど課題がありました。今後の課題解決に向けて取り組める様、事業計画をしていきたいと思いました。
- ・高齢者向け事業の意義や”高齢者”とはなど職場で話していきたい、と改めて感じました。
- ・他市ともっと交流したいと思いました。
- ・加入市が減ってきているが、継続していくことに意義があると思います。
- ・私は62歳で定年退職して、翌年小金井市の高齢者学級に参加しました。毎週水曜日の午前中6ヶ月間の講座で生活リズムが作れてとても良かったです。その後企画実行委員の誘いを受け今年5年になります。その間高齢者学級の参加者の皆さんと交流で仲間が増えて、退職後の生活がとても充実したものになりました。公民館に参加したお陰です。
- ・資料の事前配布があり内容を確認し質問事項もまとめて出席したらより効果が出るのではないか。
- ・地域を巻き込み、市民の活性化につながれば良い。その対策がなかなか見出せないのが課題。
- ・久しぶりの東京大会、充実した内容で参加したかいがありました。きびしい時代だからこそ、公民館のあり方について、しっかり考えていきたいと思いました。
- ・大きな会に初めて参加させて頂き良かったです。これからの社会でシニア世代をどう学んで社会と関われるか意義ある講演でした。自分なりのうけとめ方ですが、前向きに積極的にとりくみたいと思いました。ありがとうございました。

- ・数年ぶりに公民館に戻り、公民館利用者の高齢化等様々な問題に直面し、今回の大会テーマの内容についてどう考えたら良いか戸惑っていました。本日の午前中の基調講演、そして午後の基調講演と事例報告等を伺い、全体像を把握することができ、とてもよかったです。ありがとうございました。
- ・都公連の参加している市が減少していると聞くが、これからますます公民館が必要になるので、この大会はぜひ継続してほしい。一部の職員、当番？の自治体だけが負担を背負うのではなく、公運審、市民の力をどんどん借りた方が良い。職員だけの運営は限界なのでは？
- ・後半は事例をじっくりと学ぶ機会になりました。全体会と課題別集会の二本立てはセットにして行うのがやはり効果的です。非加盟市の方も多く見受けられたので、公民館と銘打ってなくてもぜひ加盟してほしいものです。（会場が少し寒かったです）
- ・社会全体を考えると、今が良ければいい、自分だけ良ければ良い、自分のことだけでいっぱいいっぱいなど、地域に目を向けられない、長い目で見られないで、公民館の活動や社会教育に目を向ける余裕がない状況で悩ましいところです。
- ・保育室の意味と意義を再認識できた。利用者を単なる利用者で終わるのではなく、公民館を担う人にいかに高めていくかが課題をいただきました。"
- ・公民館の役割が現在、学ぶ場だけになっているように思える。地域づくりにつながる公民館はどう行くものか、何をすべきか、改めて考えるきっかけとなったとともに、今後につなげていきたいと思う。
- ・公民館に来たことのない人、興味のない人を如何に取り込んでいけるかが今後の課題だと思う。
- ・公民館に来る人は比較的時間や経済などに余裕のある人だと思います。公民館を利用していない多くの市民がいる中で地域づくりに発展できるのでしょうか。特に都市型の公民館だと一部のヘビーユーザーが利用している感じです。
- ・全分科会に参加できないのは残念だが、自分が参加した限りについては全体会、分科会とも大変に有意義であった。公民館運動が社会教育の理念に基づき、今こそその力を発揮する時だと感じた。人間は60兆もの細胞からでき、赤ちゃんは魚の時代から35億年の人類の歴史を体内で経験してくるといふ、神秘的なもの。子どもはサムシンググレートからの贈り物なのだから、大切にみんなで育てるといふ視点が必要と思う。それは、子どもの教育のその任を大きく担う母親、父親、その他の大人を含めて社会教育の力を行使すべきだ。戦後日本の学校教育の弊害もあり、学社一体がなかなか難しいところもありそうだが、この方向で日本人は進むべきと思う。
- ・分科会の事例発表から、公民館活動はネットワーク（人材）の広がりが実感で

きた。地域の拠点として発揮されている。また、事業の企画から市民が多いに関わるなど、協働体制が取れているなど参考になった。新しい人材を取り込むきっかけとしては、PTAの活用、若者のカフェや開館時間の工夫など参考になる。福生においても、まだまだノリ白があることを感じた。公民館活動において、職員の役割は大きいことは言うまでもない。公民館を職員育成としてキャリアの中に公民館を経験するということを期待したいと思った。職員の皆様本当にいつもありがとうございます。今大会もご苦労さまでした。

・公民館は、地域コミュニティの拠点である、と改めて感じさせられた研修会でした。公民館での活動を振り返り、再確認することで、さらに活動を進める力となると思いました。共に学び合い交流する場としての公民館活動に期待します。また、職員の方々がいかに公民館活動を地域につなげるための力、要になるのか、といったことも感じさせられました。本日はありがとうございました。今回のいろいろなお話を聞いて良い経験ができ、生きていく上での良い学びとなりました。

- ・読みにくい資料があったので配布前に確認されると良いかと存じます。
- ・田中先生のお話が楽しく、最後のパネルディスカッションは勉強になりました。(これまで公民館に来なかった人が来るようになった話など)
- ・全体基調講演も課題別集會も学ぶことが多く、大変ためになりました。特に、課題別集會では、他自治体の意欲的な取り組みを知ることができて、とても刺激されました。また、理念だけでなく、組織がしっかりしていて感心しました。
- ・全体会はやはり研究大会には必要だと思いました。G o o d ! 全体会にはやはり東京都の職員にも参加してほしかったですね。(課長代理の職員でも)
- ・教育には3つの教育があり、家庭教育、学校教育、社会教育。時間帯別にする、夜から朝にかけて家庭教育、朝から夕方まで学校教育、そして夕方から夜が社会教育だと考えています。この3つの教育をどのように連携させていくのかが課題であり、この辺を考えていくと公民館活動が見えてくるのではないかと思います。現在は特に60才以降の方の活動場となっており、それはそれで良いと思いますが、子どもたちや若手の活動拠点になっていないです。そこも大きな問題だと思います。また、学校側に社会教育を受け入れる体制が無い。学校側も変わっていかないといけないと思う。市民をどう協働していくことが課題だと感じました。
- ・課題別集會、時間配分を考えると事例は3つあったが、2つで良いのではないか。テーマである「地域づくり」にフォーカスを絞れば、1つでも良かったかもしれない。地域での事例が増えれば増えるほど背景が異なり、論点が拡散してしまう。公民館が地域づくりをするのではなく、公民館を利用する市民、住民によって知育づくりとなるように職員が支援することを改めて確認できた。
- ・各地域の公民館の性質の違いがあると思います。文科省の方針で均一化する必

要はないと考えます。各地域の職員さんに頑張っていたきたいです。

・かなり久しぶりに公民館研究大会に参加し、社会教育の現状が良く分かって良かったです。三多摩テーゼをはじめ社会教育の意義を聞いて、私も30数年に学んだことを思い出しました。

・全体として、全体講演のテーマ「公民館と学校の統一」が第2課題の「公民館から始める地域づくり」に繋がっており、大変有意義でした。

・世代を越えつながらと学びの場として価値向上になればと思います。その中で地域の特性を生かした取り組みなど、例えば、福生市なら国際交流(言葉・文化)の場として特化させるのも一考ではないかと思います。

・市民の方の参加が少なくとても残念でした。官の側の交流会では狭いと思います。

・刻々と人間の状態状況は変わります。「昨日」の仕組みだけが取り残され「今日」の私たちが苦しんだりすることがあります。いつも「今日」の私たちのためにある仕組みでなければなりません。そういったことを考える手助けをする社会教育であると良いと思います。

・単なる社会教育としての役割以上にまちづくりにも重要な役割を担っていることを知りました。大きな視野で考えてみようと思います。

・人と人とのつながり！元気のお年寄りも出向いての発表会等も公民館の発展にも良いと思う！

若者のダンスの躍り場としても最高だと思います。種々人達の集まりとして最高です。

・分科会(第四)のグループ討議は参加型で良かったと思います。座学でないのが良いと思います。できることなら、各グループに30代、40代の人を一人は加える編成が必要だと思います。意見が偏らないために。

## 第53回東京都公民館研究大会参加状況

No.	市町村名	第1課題別集会	第2課題別集会	第3課題別集会	第4課題別集会	全体会	各市の合計
1	昭島市	2	3	2	7	14	14
2	町田市	6	4	3	3	16	16
3	小金井市	20	14	5	4	43	43
4	小平市	1	6	1	3	11	11
5	日野市	3	4	3	2	13	12
6	国分寺市	11	16	4	2	33	33
7	国立市	3	3	1	3	10	10
8	西東京市	7	13	8	7	35	35
9	福生市	14	9	5	4	34	32
10	狛江市	2	7	1	2	12	12
11	東大和市	3	3	0	4	10	10
12	立川市	7	2	0	0	9	9
13	調布市	5	3	0	1	9	9
14	羽村市	1	1	1	0	3	3
15	あきる野市	1	1	2	0	3	4
16	北区			1		1	1
17	(講師)					1	
18	(助言者)	1	1	1	1	4	4
19	(事例報告者)	4	3			7	7
計		91	93	38	43	268	265
						※全体会のみ参加者3人	

**第 53 回東京都公民館研究大会記録**

発 行：平成 29 年 4 月

編 集：第 53 回東京都公民館研究大会企画委員会

大会事務局：福生市公民館

〒197-0024 福生市牛浜 163（さくら会館内）

電 話 042-552-2118

F A X 042-552-2228